注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
伝説の決闘者達の幻想入り

【作者名】
豆鉄砲Ｘ☆

【あらすじ】
ある世界には歴代に渡り語り継がれる伝説の決闘者達がいた。名もなきファラオの魂を持つ決闘者、武藤遊戯。精霊と心を通わせる事が出来る決闘者、遊城十代。仲間との絆を結びつける決闘者、不動遊星。そして何事にも諦めないチャレンジ精神を持つ決闘者、九十九遊馬。
彼らはそれぞれある人物達に異世界に……幻想郷へと連れて行かれる。今伝説の決闘者達が集結し、新たな物語が始まる！

※この小説は遊戯王　東方のクロス作品です
※ルールはマスタールール２を使用
※表側守備表示での召喚あり
※ＬＰ４０００制

2つの魂を持つ決闘者

僕の名前は武藤遊戯。海馬君から手紙をもらって海馬ランドまで来いって言われたけど……

「何の用だろう？」

僕は呼ばれた理由が気になっていた。まさかまたデュエルかな？

「海馬君？どこにいるの？」

僕は指定された施設に辿り着いた。しかし室内は真っ暗で何も見えない

「残念ながら海馬瀬人は来ないわよ？武藤遊戯君」

「だ、誰!?」

突然前方にライトの光が射し込み、一人の女性が立っていた

「貴女は？」

「私は八雲紫。貴方をここに呼んだ張本人よ」

僕を呼んだ？どうして海馬君を装ってまで？

「聞きたいことは色々あるでしょう。でも申し訳ないけれど、貴方には私の世界に来てもらうわ」

「紫さんの世界？それはどうゆう……」

「いづれわかるわ。また機会があれば会いましょう?」

「ちょっと待って!」

紫さんを呼び止めようとしたとき、突然足下に謎の空間が現れた

「うわあああああぁぁぁぁぁぁ!!!!」

僕は状況が上手く把握出来ないままその空間に落とされた

「こちらは終わった……あっちは他の3人に任せるとして私は一度戻るとしましょうか」

「っいたたた……ここは?」

僕は確か変な空間に落とされて……って事はここが紫さんの世界?

「それにしても深い森だなぁ……全然前が見えないなぁ」

そんな事を考えていると……

ガサガサ

「っ!?誰!?」

後ろの草むらが揺れたのに気付いた。その瞬間……

「ふぅ……今日の収穫はまあまあかな？」

魔法使いのような格好をした女の子が出てきた

「び、びっくりした……」

「ん？お前は誰だ？」

「僕は武藤遊戯。訳あってこの森に……と言うかこの世界に迷い込んじゃったんだ」

「って事は外来人だな？」

外来人？やっぱりここは僕がいたところとは別世界って事かなぁ？

「まぁ、十中八九紫の仕業だろうが……元の世界に帰りたいなら私が霊夢に頼んでやろうか？」

「霊夢？」

「この世界の巫女だよ。皆からは博麗の巫女って言われてる」

「博麗の巫女……その人に会えば元の世界に帰れるの？」

「多分な？でもアイツも気紛れだからなぁ……保証できるわけでは無いぜ？」

巫女なのに気紛れって……大丈夫なのかなぁ？

「他に当てもないし、お願いするよ」

「おう！任せとけ！あっ、私は霧雨魔理沙だぜ！よろしくな、遊戯！」

「うん。こちらこそよろしく！魔理沙さん」

「〝さん〟なんて付けなくていいぜ？なんかそう言われるとムズ痒くてしかたねぇしな」

「う、うん。分かったよ。魔理沙」

「おう！じゃあ早く行こうぜ！」

こうして僕は魔理沙についていく形で博麗の巫女と呼ばれる女の子の元へと向かった

少年少女移動中…

「幻想郷？」

「ああ。ここには吸血鬼、亡霊、蓬莱人みたいな妖怪たちも住んでいるんだ。この幻想郷は外の世界で忘れられた存在や虐げられた奴等がよく迷い込むんだぜ？まぁ、そんな奴等が共存するために紫がここを創ったんだけどな？」

紫さんはそんな事が出来るんだ……って事は僕は紫さんの不思議な力でここに飛ばされたってこと？

「おっと、話してる間に着いたぜ？」

着いたのは長い階段の前だった。一番上には立派な鳥居が見える

「ここの階段は少し長いが頑張ってくれよ？」

「うん」

なんか子供扱いされてるような気がする……

僕はそんな事を考えながら階段を登る。そして上まで登り境内で掃除していたのは紅白の巫女服を来た女の子だった。恐らく彼女が博麗の巫女なのだろう

「よう霊夢！」

「なんだ魔理沙か……またお茶でも集りに来たの？」

「そうつれない事言うなって。今日は霊夢に客を連れてきたんだ」

「客ねぇ……まさかまた外来人？」

「ああ。どうやらそのようだ」

「ふーん……。それで今回はその子供？」

子供って……僕は一応高校生何だけどなぁ……

「で、どうなんだ？やってくれるか？」

「……悪いけど今は無理よ？現在は結界が不安定な状況にあるから外の世界に境界を繋げる事が出来ないの。無理にでもそんな事をしたら幻想郷が崩壊しかねないわ」

「そんなヤバイ状況なのか……仕方がないか……。ごめんな、遊戯。力になれなくて」

「ううん、気にしなくていいよ。」

「……貴方今遊戯って言った？」

「え？う、うん……」

なんか急に真剣な表情になったけどどうしたんだろう？

「……いいわ。貴方をここに泊めてあげるわ」

「なっ!?霊夢!?お前なんか悪いもんでも食ったか!?」

「食ってないわよ！アンタは私を何だと思っているの！」

僕を泊める？でもそんな事をしても霊夢さんにはメリットはない

はず……これが気紛れってやつ？

「まぁ、いいわ。安心しなさい。別に何をどうこうする訳じゃないから」

「ありがとう。助かります。霊夢さん」

「霊夢でいいわ。そっちの方が呼びやすいでしょ？」

「うん。分かったよ。霊夢」

「何か困った事があったら私にも相談しろよ？いつでも相談に乗ってやるぜ？」

「ありがとう。魔理沙」

「じゃあ今日は帰るな？また明日来るからな！」

そう言うと魔理沙は箒に股がって飛んでいった。……本当に別の世界なんだね

「それじゃあこれからよろしく。遊戯」

「こちらこそよろしく！」

これからどうなるか心配だけど、考えても仕方ないから今日は少し

休む事にした。幻想郷……忘れられた者が集う世界か……。もしかしたらもう一人の僕も?……まさかね?

精霊の力が宿る決闘者

俺の名は遊城十代！風の向くままに旅をしている決闘者だ！

「次は何処へ行くんだい？十代」

こいつはユベル。ある事件がキッカケで俺と魂が融合したデュエルモンスターの精霊だ

「そうだなぁ……異世界でも行くか？」

「君は相変わらず思考が判らないのニャ……」

このしゃべり方が特徴的な人（？）は大徳寺先生。かつて俺の通ってたデュエルアカデミアの先生だったんだ。今は幽霊をしている

「だったら貴方を異世界に連れてってあげましょうか？」

「誰だ!?」

突然謎の声が聞こえたので辺りを見回してみたが、何処にも声の主が見当たらない

「十代！上だ！」

「何!?」

上を見上げると、変わった衣服を来た女性が浮いていた

「ひ、ひひひひ人が飛んでるニャ！」

「……あんたが言うな」

幽霊である大徳寺先生に突っ込みをいれつつ、再び女性の方へと目を向けた

「このくらいじゃ動じないのね？流石は精霊と心を通わすことの出来る決闘者ねぇ♪」

「!?俺の事を知っているのか!?」

女性は微笑みを浮かべながら俺の目の前へとおりてきた

「先ずは自己紹介をさせてもらうわね？私は西行寺幽々子。私の親友に言われて貴方を……貴方たちを幻想郷へと連れていくわ」

っ!?ユベルたちが見えているのか!?この幽々子って人は一体何者なんだ!?

「私は何者なのか、って顔してるわね？私は亡霊よ。正真正銘の……ね？」

幽々子は不敵な笑みを浮かべながら手に持っている扇子を広げた

「亡霊だと？成る程な。それなら納得だ」

「あら～、あっさりと信じちゃうのね～？」

「そのくらいじゃ驚かないさ。今までだって非常識的な事を味わってきたんだからな」

「それもそうねぇ～♪」

幽々子はまるで俺がどんな人生を歩んできたか知ってるような口調で答えた

「気をつけろ、十代。こいつは何か企んでいるかもしれないからな」

「あらあら、連れないわねぇ～」

「あからさまに落ち込んだフリをするのはやめろ。どうせこちらの有無を問わずに幻想郷とやらに連れていくつもりなんだろ？」

「そうよ～♪では3名様ごあんな～い♪」

幽々子はそう言いながら手元のカードに手をかけた

――『次元の裂け目』

「うっ!?くっ！うあああぁぁぁ!!!!」

「十代!?」

「十代君!?」

「ニャー！」

そして俺たち3人と一匹……猫のファラオって言うんだが、俺たちは次元の裂け目に吸い込まれ異世界へと旅立った……

「こちらは完了……さてと、彼らは私たちの幻想郷に何をもたらしてくれるのかしらねぇ♪」

ビックリしたなぁ……まさかあんな方法で連れてこられるとは思わなかったぜ。ん？なんか風の勢いが強いような……

「って、うおおおおおぉぉぉぉ!?」

まさかの空中に放り出されてる!?仕方ねぇ！こうなったら！

「来い！ネオス！」

ハァ！

俺はネオスを召喚し無事に地面に着地することが出来た

「助かったぜネオス。またよろしくな」

ネオスは俺の言葉に頷くと、デッキへと戻っていった

「ここが幻想郷……想像とは違うな……」

着いたところは一つの屋敷にある庭だった

「十代。向こうから誰か来るぞ」

「何？」

ユベルに忠告された方を見てみる。すると、銀髪の少女が姿を現した

「こちらの方から何か音がした様な……⁉　」

少女は俺を見つけた瞬間、背中に背負っていた剣を抜き迫ってきた

「曲者！」

「ウオぁ⁉　あぶねぇな！何するんだ！」

「貴方ですね！幽々子様の言っていた悪者と言うのは！」

「はっ⁉　一体何のことだ！」

「とぼけないで下さい！私の主人である幽々子様が言っていました。今日は不思議な力を持った怪しい人物が来ると！」

ん？幽々子ってのはさっき会った亡霊だよな……。そしてこの子は幽々子を自分の主人と言った。ってことはこの子は幽々子の付き人か何かか？

「さぁ！覚悟！」

くっ！このままやられるわけには行かない！

「来い！ブラックパンサー！」

「なっ⁉　モンスターが実体化した⁉　だけどそんな虚仮威しに騙されるとでも！」

「ブラックパンサーの効果！相手の姿をコピーし、その効果を得る！シャドウ・イリュージョン！」

ブラックパンサーは俺の指示を聞くと、みるみると少女の姿へと変わっていった

「なっ⁉　私と同じ姿⁉　」

姿を変えたブラックパンサーは剣を抜き、彼女と剣を交えた

「くっ⁉　ソリッドビジョンじゃない⁉　」

「俺は怪しい奴なんかじゃない！俺は幽々子に連れられてこの世界に来た！お前たちの敵じゃない！」

「……そうだったんですか」

少女は剣を鞘へと戻した。俺もブラックパンサーをカードへと戻しデュエルディスクを閉じた

「すみません。知らなかったとはいえ突然襲いかかるような真似をして……」

「別に気にしなくていいよ。慣れてるし」

「そ、そうですか……」

主に異世界で……

「ところで、貴方はどうしてこの世界に？」

「幽々子が親友に頼まれてとは言っていたが、それ以外の理由は知らないな」

「そうですか。……また紫様の気まぐれですかね」

「ん？何か言ったか？」

「いえ。なんでもありません」

今なにか呟いたように聞こえたが……気のせいか？

「あっ、そう言えばまだ貴方の名前を聞いてませんでしたね。」

「っと、そうだったな。俺の名前は遊城十代！」

「私は魂魄妖夢。宜しくお願いします、十代さん」

「ああ！こっちこそ！」

さっきとは違って友好的だな。まぁ、普段からあんな性格だったらさすがに困るが……

「ところで十代さんはこれからどうするつもりなんですか？」

「ん？この世界の事もよく知らないし、特に決めてはないが……」

「でしたらこの白玉楼に泊まられてはいかがですか？」

「白玉楼？」

「ええ。私と幽々子様が住んでいるところです。一応ここは幻想郷の冥界に位置する場所ですが……」

「冥界⁉　俺が死んだ訳じゃないよな⁉　」

「大丈夫です。この世界の住人でもここに来る人はいますから」

冥界って普通に行き来出来るものなのか？

「十代。どうやら我々の世界の常識は通用しないようだ」

ユベルの言う通りだな。異世界の時と同様、世界が変われば常識も変わるんだな

「どうします？私は別に構いませんが」

「そうだな。行く当てもないし……お言葉に甘えて泊めさせてもらうよ」

「分かりました。では白玉楼の中を案内します」

これから幻想郷の生活が始まるのか……なんだかワクワクするな！

絆を繋ぐ決闘者

俺の名は不動遊星。このネオ童実野シティに住む1人の決闘者だ。

「風が気持ちいな……」

俺は今、D・ホイールと呼ばれるものに乗っている。

「これから俺はどうすればいい。この街の為に何をすれば……」

俺は今までこの街をより良い街にする為に努力してきた。かつて共に戦った仲間がいつ戻ってきても……自分の街を誇れるようにするために……

「っ!? あれは……」

俺がそんな事を考えていると、目の前に1人の女性が立っていた。俺はD・ホイールを降り、彼女に歩み寄った

「……この街は素晴らしい。皆が笑顔で楽しそうに過ごしている」

?彼女はこの街の人間では無いのか?

「そしてお前もだよ。不動遊星」

「なっ!? 俺のことを知っているのか!? 」

「勿論だ。寧ろ知らないと思っていたのか?世界を救った英雄……不動遊星」

「あんたは一体何者だ？」

「紹介が遅れていたな。私の名前は八坂神奈子。この世界とは別の世界……幻想郷の神だ」

別の世界？神だと？どう言うことだ？何故そんな人物がこの世界に？

「ふっ、信じられないか？だが事実だ。私はお前を我々の世界に呼ぶ為にやって来た」

「何⁉　どう言うことだ！一体何が目的なんだ！」

「悪いが答えることは出来ない。だがお前をとって食おうなどと言うわけではない」

俺を異世界に連れて行って何のメリットがあるんだ？こいつは一体何を企んでいる？

「すまないがお前に拒否権はない。これも我々の世界に必要なことだ」

「……分かった。あんたの言う通りにしよう」

「随分とアッサリと承諾したな。これから何が起こるか分からないんだぞ？」

「ああ。だが俺を必要としてくれる人がいるならば、俺はその人のために全力を尽くす。それだけだ」

「成る程。流石は英雄と呼ばれるだけのことはあるか……。では早速お前を我々の世界に……幻想郷に招待する」

ーー『次元の裂け目』

「うっ!?　くっ……うわあああああぁぁぁぁぁ!!　!!」

こうして俺は、幻想郷と呼ばれる世界に飛ばされた

「こちらは完了した。私も一度戻るか……」

「うっ……ここは……」

そうだ……俺は確か八坂神奈子に飛ばされて……。ってことはここが幻想郷か……

「あら?もしかして参拝客ですか?」

「何?」

声がした方を見ると、緑の髪をした少女が此方を見ていた

「あれ?貴方……どこかで見たような……」

少女は少し考える素振りを見せた

「失礼ですがお名前は？」

「……遊星だ。不動遊星」

「不動遊星……遊星……って、あぁーーー⁉」

「⁉　ど、どうした？」

「も、ももももももしかして！あのネオ童実野シティを救った英雄……不動遊星ですか⁉」

「あ、ああ。確かにそうだが？」

「やっぱりですか！こんな所で会えるなんて感激です！あの！サイン下さい！」

……一体どんな対応を取ればいいんだ？

「落ち着きなさい、早苗。お客さんが困っているじゃないか」

俺が途方に暮れていると、奥から小柄で変わった帽子をかぶった少女が出てきた

「神奈子から聞いてるよ。君が不動遊星君だね？」

「あんたは？」

「私は洩矢諏訪子。こんな見た目でも祟り神なんだよ～？この子は東

風谷早苗。この守矢神社の巫女だよ」

この子も神さま？こんな小さい子供でも神なのか

「おっと。見た目は子供でも実際は数え切れないほどの年月を生きてるんだよ？遊星君よりも遥かに年上さ」

心を読まれた⁉　どうやら本当のようだ。この世界は俺の住んでいた世界とは全く違うようだな

「ふふふ。自分の世界とは全く違うことに戸惑っているようですね。では教えてあげましょう！この世界では、常識は通用しないのですよ！」

……常識を捨てるのは巫女として大丈夫なのか？

「ああ……気にしなくていいよ。この子の悪い癖だから……」

「わ、分かりました」

取り敢えずこの世界は俺の世界とは違うと言う事だけ覚えておこう

「っと、それと私達には敬語は使わなくていいよ。これからこの神社に住むわけだし？」

「えっ？」

「あれ？神奈子から聞かなかった？ここに連れてきてから遊星君の面倒を見てあげてって言われてたんだけどなぁ……」

一言も聞かされてないな。だがこの世界の事は右も左も分からない状態だ。ここは大人しく言うことを聞いておいた方が無難か……

「住まわせてくれるのであればありがたい。もちろんただでとは言わない。俺に出来ることがあれば何でもする」

「全然大丈夫だよ！元々そのつもりだったし！ねぇ？早苗」

「はい！憧れの遊星さんと一緒に過ごせるのであれば本望です！」

「憧れ？」

「この子は君の大ファンでね。君のフォーチュンカップで見せた決闘にすっかり見惚れてたんだよ。それから君の決闘はいつも見逃さずに見ていたんだ。デッキも君のデッキに似ているカードを使っているんだよ」

「俺の決闘を見ていた？何故だ？この世界と俺の世界は違うのではないのか？」

「この世界の住人は外の世界から来た人が殆どなんだ。それで私達は君と同じ世界から来たから君の事をよく知っている」

そういうことか……

「何はともあれ、これからよろしく頼むよ♪不動遊星君」

「よろしくお願いします！遊星さん！」

「ああ。こちらこそよろしく頼む。諏訪子、早苗」

幻想郷か……この世界ではどんな出来事が待っているんだ？ふっ、少し楽しみだな……

チャレンジ精神を宿す決闘者

俺の名前は九十九遊馬！デュエル好きの普通の中学生だ！

「……ふぅ」

「やっぱりここにいたのね。遊馬」

「小鳥か。どうした？」

こいつの名前は観月小鳥。俺の幼馴染だ

「どうした？じゃないわよ。最近遊馬の様子がおかしいから見に来たんじゃないの」

「俺の？」

小鳥にはさすがにバレるか……。バレたら言った方がいいか……

「……アストラルの事ね？」

「っ⁉」

アストラル……かつて俺とともに戦った最高の相棒だ。あいつは俺とデュエルをして敗れ、自らの世界に帰った

「私は遊馬と小さい頃から一緒にいるのよ？そのくらいの事は分かるわ」

「……流石だな。そこまでバレていたなんてな」

「遊馬……アストラルはもうアストラル世界に帰ったのよ？いつまでも引きずってたら……」

「分かっている……でもあいつは！」

あいつは俺の……掛け替えのない仲間だったんだ。そう簡単には割り切る事は……

「全く……君は相変わらずだな」

俺がアストラルの事を考えていると突然後ろから声が聞こえた

「なっ⁉　この声はまさか⁉　」

聞き覚えのある声が聞こえ、声の方を振り向いた。すると……

「久しぶりだな。遊馬」

『アストラル⁉　』

そこにはかつての相棒……アストラルの姿があった

「お前！どうしてここに⁉　」

「エリファスに言われた。もうすぐ新たな危機がやって来る。遊馬の元に行き再び共に戦えと告げたんだ」

「エリファスが？」

新たな危機？一体今度は何が起きるって言うんだ？

「やっと見つけたわよ。九十九遊馬、アストラル」

「⁉　誰だ⁉」

俺たちは声が聞こえた方を見た。するとそこには1人の女性が立っていた

「私は八意永琳。貴方達を迎えに来た者よ」

「もしかして今話していた新らたな危機にも関係してるんですか？」

「そうね。貴女の言う通りよ。観月小鳥」

小鳥の事も知っている⁉　こいつは一体何者なんだ⁉

「そう警戒しなくてもいいわ。少なくともあなた達の敵では無いわ」

「遊馬。恐らく彼女の言っていることは本当だ。信用しても問題無いだろう」

「アストラルがそう言うなら俺も信じる」

「ふふ、ありがとう。アストラル」

「私の姿が見えるのか？」

アストラルは普通の人間には見えないはず……何でこの人には見えるんだ？

「ええ、私には見えるわ。でも安心して。さっきも言った通り貴方の

敵では無いわ」

「……分かった。で？俺たちは何をすればいいんだ？」

「単刀直入に言うわ。貴方達には私たちの世界に来てもらうわ」

「あんたの世界？どう言う事だ？」

「私はこの世界の住人ではないわ。この世界とは別の世界……幻想郷の住人よ」

別の世界⁉　バリアン世界とアストラル世界以外に別の世界があるのか⁉

「知り合いに頼まれてね。詳しい事は私にも知らされていないわ」

「理解はした。だが貴女の世界に行くにはどうすればいい？我々も2つの異世界には行ったことはあるが、どちらも簡単には行けなかった」

「安心して。少し強引だけど行く方法はあるわ」

アストラルが異世界に行く方法を尋ねると、永琳は答えた

「遊馬が行くなら私も行く！」

「小鳥……」

「残念だけど貴女を連れて行くことは出来ないわ」

「どうして⁉　」

「知り合いに言われたのよ。別の人物は連れて来るなって」

「そんな……」

小鳥……

「私たちの世界……幻想郷は特別な力を持ったものでなければ来れないわ。もし貴女のような一般人が来たら、2度とこの世界に戻ってこれないわ」

「特別な力？俺にはそれがあるってことか？」

「ええ。その皇の鍵が証拠よ」

皇の鍵が？

「貴方だけじゃない。更に別の世界からも特別な力を持った人物を呼んでいるわ」

「遊馬以外の人物？まさか⁉ 」

「アストラル。まだ言っちゃダメよ？」

「……分かった」

アストラルの奴どうしたんだ？

「遊馬……私！」

「小鳥……俺は必ず戻ってくる。だからそれまで待っててくれ」

「……うん。分かった。必ず戻って来なさいよ！そうでないともうデュエル飯作ってあげないわよ！」

「おう！任せとけ！かっとビングだ！俺ぇ！」

「覚悟は決まったみたいね。では早速幻想郷に送るわね？」

ーー『次元の裂け目』

「くっ⁉　うあああああああぁぁぁぁぁぁぁ‼　‼　‼　」

「遊馬……必ず無事で戻って来て……」

「大丈夫よ。彼は私が責任を持って面倒を見るわ」

「お願いします……」

「さて……私もひとまず八雲紫に報告しないといけないわね」

いってぇ……強引にも程があるだろう……

「大丈夫か？遊馬」

「ああ。アストラルこそ大丈夫だったのか？」

「私は問題ない。それより幻想郷に辿り着いたようだ」

アストラルの言う通り……俺たちは幻想郷に着いたみたいだ。だけど……

「……ここどこだ？」

辺り一面どこを見ても竹しかない……。どうすればいいんだ？

「どうやらここは竹林のようだな」

「それは見たら分かるよ。そんな事じゃなくてこれからの事を考えねぇと……」

俺たちはこれからのことに悩んでいると……

「あら？もしかして迷子？」

声が聞こえた。声の元を見ると籠を担いだピンクの長い髪をした女の子がいた

あれはうさ耳か？取り敢えずこの人に道を聞いてみるか

「ああ、少し迷っちゃてな。ここはどこ？」

「この竹林の事を知らないの？って事は貴方は外来人ね？」

外来人？何で俺が別の世界から来た事を知っているんだ？

「ここは迷いの竹林。初めて来た人は確実に迷うわよ？」

「マジで⁉　」

くそ……どうすればいいんだ！

「だったら私の住んでいる場所に案内しましょうか？」

「えっ⁉　いいのか！」

「勿論よ。困った時はお互い様でしょ？」

「遊馬。ここは彼女に任せた方がいいだろう」

「ああ、そうだな」

「？急に独り言を言ってどうしたの？」

「あっ、いや、何でもねぇよ」

そうか。この人にはアストラルは見えないのか

「忘れてた。私の名前は鈴仙・優曇華院・因幡。鈴仙でいいわよ」

「ああ！俺は九十九遊馬だ！よろしくな！」

「ええ、じゃあこっちよ。着いてきて」

「おう！」

俺は鈴仙について行こうと歩き出した。しかし……

ーー『落とし穴』

「きゃあ⁉　」

鈴仙が落とし穴に落ちた

「おい⁉　大丈夫か！」

「いったったった……てゐの奴ね！こんな事をしたのは！」

取り敢えず俺は穴にハマった鈴仙を助け出した

「これからも同じような罠があるかもしれないわ。注意していきましょう」

「あ、ああ……」

幻想郷って大変な場所なんだなぁ……

少年少女移動中…

はぁ……はぁ……この竹林は一体どうなってるんだ……

「はぁ……はぁ……てゐの奴……次会ったらしめる……」

鈴仙がおっかない事言ってる。てゐって奴はどんな奴なんだ？

「それにしても……ここまで色んな罠があったな」

回想ーー

『気を付けて遊馬。あそこに明らかな落とし穴があるわ』

『ならば飛び越えるまでだぜ！かっとビングだ！オレぇ！』

『あっ⁉　待って！遊馬！』

『えっ？』

ーー『二重の落とし穴』

『うぉあ⁉』

『二段構えの罠か……効果的なトラップだ』

『感心してる場合か！ん？何だ？この紐は……』

ーー『パイナップル爆弾』

『うぉ⁉　何だ何だ⁉』

『落ちた落とし穴に更に罠を仕掛けるか……敵ながら中々やるな』

『だから感心するなって！』

『ごめんなさい……てゐの奴が迷惑かけて……』

ーー回想終了

「でもやっと鈴仙の家に着いたんだし、サッサと入ろうぜ」

「あっ⁉　待って！」

「ん？」

ーー『黒板消しの罠』

「ぐぁ⁉　」

「成る程。最後まで油断するなって事か」

うっ……こんな所でも罠があるなんて……

「あいつは仕掛けられるところならどこにでも仕掛ける奴よ。油断しないほうがいいわ」

「先に言ってくれよ！」

まぁ、さすがにこれ以上は無いだろう

「この部屋が客間よ」

「よし！やっと休めるぜ！」

「だから慌てないでって！」

ーー『地獄の扉越し銃』

「うぉ⁉　今度は何だ⁉　」

「君には学習能力と言うものは無いのか？」

「う、うるせぇ！」

ったく……アストラルは一言多いんだよ……

「ウサウサウサ！面白い反応ウサ！」

この声は⁉

罠が発動したところを見ると、うさ耳を付けた小柄の少女が腹を抱えて笑っていた

「可笑しくって腹痛いウサぁ～！」

……なんかどっかで聞いたことあるセリフだな

「て～ゐ～？」

「げっ⁉　鈴仙⁉　」

「覚悟しなさい！」

「やばっ……逃げるウサ！」

「待ちなさい！」

「……ふっ、掛かったウサね？」

ーー『畳返し』

「はうっ⁉　」

てゐが小さく微笑んだ時、突然畳がひっくり返り鈴仙の顔に直撃した

「敵を誘い出して相手を自分の罠にかけるか……どうやら彼女は罠の達人のようだ」

「そんな事言ってる場合かよ！おい、大丈夫か！鈴仙！」

「いたたたた……ええ、大丈夫よ」

「ウサウサウサ！今の内に逃げるウサ！」

てゐはすぐ様振り向き逃げ出した

「てゐ？随分と大切なお客様を可愛がってくれたわね？」

「えっ⁉　ま、まさか⁉　」

この声はまさか⁉

「し、師匠⁉　」

「永琳⁉　」

師匠ってどう言う事だ？鈴仙の師匠？永琳と鈴仙はどんな関係なんだ？

「てゐ……覚悟は出来ているんでしょうね？」

「師匠⁉　落ち着いてください！これには深い訳が……」

「問答……無用よ！」

「う、ウサぁ～～～～～⁉　」

……これからは永琳を怒らせないよう気を付けないといけないな

色々あったが、俺は永琳に言われてこの永遠亭と呼ばれる場所に泊めてもらえることになった。大変な日常になりそうな気がするが……どんな事があっても乗り越えてやるぜ！かっとビングだぁ！

俺ぇ！

再開、蘇る王（ファラオ）の魂

僕は霊夢さんにこの世界のことを色々と聞いていた。どうやら少し前までは弾幕ごっこと呼ばれる対戦方法があったが、今では紫さんが誰も傷つかないようにデュエルモンスターズをこの幻想郷に広めたらしい

「つまりこの世界でも僕達の世界の戦い方が通用するって事だね？」

「ええ、そうよ。もちろん遊戯の時代には無かったカードもあるわ。それらを使ってデッキを改良してみてもいいんじゃないかしら？」

そっか。この世界のデュエルは僕の世界よりも進んでる可能性があるわけだもんね……

「うん、ありがとう。ゆっくりと考えさせてもらうよ」

僕と霊夢さんが話していると……

「おーい！遊戯～！」

魔理沙が箒にまたがって飛んできた。この世界の住人は空を飛んだり特別な能力を持っていたりするらしい

「魔理沙？どうしたの？」

「昨日言っただろ？次の日もまた来るってな」

僕が質問すると魔理沙は微笑みながら答えた。何だか城之内くんを思い出すなぁ……

「実はお前を連れて行きたいところがあるんだ」

僕を？一体どこだろう……

「魔理沙……あんたまさか、紅魔館に連れて行こうなんて思ってないわよね？」

「安心しろ。そっちじゃないから」

紅魔館？行くわけじゃないけどどんなところかは気になるな……

「取り敢えず行こうぜ！ほら！」

「う、うん」

「まぁ、紅魔館じゃ無いなら大して危険はないか……。気を付けて行ってきなさいよ？」

僕は見送ってくれる霊夢に手を振り、魔理沙の乗る箒の後ろにまたがった

うっ……さすがに女の子と密着するのはドキドキするなぁ……

「よし！じゃあ飛ばすからしっかり掴まっておけよ？」

「えっ？うん」

魔理沙がそう告げると、僕達は宙に浮かび上がり物凄い勢いで上昇した

「うわあああああぁぁぁぁぁ!? 」

「……大丈夫かしら？」

少年少女移動中…

「っと、到着だな。ん？どうした？」

「い、いや。何でもない……」

今後魔理沙の箒に乗る事は控えよう……

「そうか？っと、ここが目的の場所だぜ！」

僕の目の前には少し寂れた感じの建物が建っていた。看板には掠れた文字で『香霖堂』と書いてある

「ここは私の知り合いがやってる店でな……こんな森の中で商売しても儲からないから人里に来いって言ってるんだが頑固でここから店は動かさないって言ってるんだ」

「そうなんだ……」

不思議だ……。この店からは何か懐かしい雰囲気を感じる。この感じは確か……

「兎に角中に入ろうぜ？こんな所で立ち話をするのも疲れちまうしなぁ……」

「うん。そうだね」

魔理沙の意見に賛同し、僕達は香霖堂の中に入った

「いらっしゃい」

挨拶してくれたのは本を読んで眼鏡を掛けている銀髪の知的な男性だった

「ってなんだ、魔理沙か何か用？」

「なんだはないだろう？今日は客を連れてきたんだぜ？」

「客？その子のことかい？」

また僕を子供扱い……慣れてはいるけどさすがに悲しいものがあるなぁ……

「いらっしゃい。何か見たいものはあるかい？」

折角だしカードでも見て行こうかな……

「じゃあ……!? 」

カードの場所を尋ねようとした瞬間、僕は目に映ったものを疑った

「あれは……まさか!? 」

僕は直ぐにその場所へと駆け寄った

「おい！どうしたんだよ！」

間違いない……これは紛れもなく……『千年パズル』！
でもなんでこんな所に……
「すいません！これはどこで手に入れたんですか？」
「ああそれ？森の中を歩いていたら偶然見つけてねぇ。でも僕の能力でも使い方が分からなかったんだ……」
「何？こーりんの力でも分からなかったのか？」
「コーリン言うな。僕の能力だって完璧じゃないんだ。仕方ないだろう」
偶然？本当に偶然なの？僕が幻想郷に来たタイミングとほぼ同じ時間にここで見つかるだなんて……。偶然とは思えない
「すいません。これを僕に譲ってくれませんか？」
「えっ？どうして？」
「これは元々僕のものなんです。僕と……もう一人の僕を繋ぐ大事な絆の証なんです」
「んー。とは言ってもやっぱり商品は商品だからねぇ。タダで譲る訳には……」
「いいじゃねぇかよ。こーりん」
「魔理沙？」

「遊戯は初めてここに来たんだ。今回くらいサービスしたらどうだ？」

魔理沙……

「そうだね……確かに彼は今日初めて来たんだ。今回だけサービスしよう」

「本当ですか⁉　ありがとうございます！」

「ただし……」

「ん？」

店員さんは一言いい魔理沙を指差す

「君の帽子の中に入っているものを出したらね」

「げっ⁉　バレてた⁉　」

「魔理沙⁉　まさか万引きしたの⁉　」

「人聞きの悪いこと言うな！私はただここにある物を死ぬまで借りて行こうかと……」

「それを世間では万引きや泥棒って言うんだよ。さぁ、返してもらうよ」

「はいはい、分かったよ……」

魔理沙は渋々と盗もうとしたものを返した。当たり前の事だと思

うんだけど……

「おい！店主はいるか！」

突然大柄な厳つい男が入って来た

「また君か……君にあげる物は何も無い！」

「そんな堅いこと言うなよ。サッサとこの店にあるカードを持って来やがれ！」

「おい、こいつは誰だよ？」

「この男は最近ここら辺でデュエリストを見つけてはアンティを挑む無法者のデュエリストだ」

「何⁉　この幻想郷ではアンティは禁止の筈だろ⁉　」

「はっ！そんなもんは八雲紫が勝手に決めた事だろ？俺が大人しく従うわけないだろ！」

この世界でも霊夢や魔理沙みたいに良い人ばかりなわけじゃないんだ

「お前はデュエリストなんかじゃない！」

「ああ、リアリストだ。さあ！サッサと持って来やがれ！」

「ぐあ！」

「こーりん！」

男は逆上して店員さんを突き飛ばした

「大丈夫か！」

「あ、ああ……なんとかね……」

「なんて酷いことを！」

「なんだ？次は餓鬼かよ。貴様なんかに用は無いんだよ！」

「うぐっ！」

「ガキはガキらしく家に帰ってお昼寝でもしてな！」

男は僕の胸ぐらを掴みそう言った

助けて……もう一人の僕……

僕は千年パズルを握り締めそう願った。すると……

「っ⁉　なんだ！この光は⁉　」

突然千年パズルが光輝き男は僕から手を離した。そして僕の雰囲気が変わっていった

っ!?　何なんだよこの光は!?

「……」

ガキの雰囲気が……変わった？

「遊戯？遊戯なのか？」

「ああ。おい、そこのでくの坊」

「ああ？テメェ喧嘩売ってんのか！」

「俺とデュエルしろ」

何？デュエルだと？この俺と？はっ！笑わせてくれるぜ！」

「俺が勝ったらお前は二度と他人に迷惑はかけるな」

「ふん！だったら俺が勝ったら貴様のデッキを頂くぞ！」

「ああ。いいだろう」

「なっ!?　バカ！それじゃあお前のリスクの方が圧倒的にデカイじゃないか！」

「安心しろ。俺は負けない」

「遊戯……」

はっ！バカな奴だぜ！こんなガキに俺が負けるわけないぜ！

「これで貴様のデッキは俺のものだ！後悔してももう遅いぜ！」

「御託はいい。早く始めよう」

「ふん！その減らず口を叩き潰してやるぜ！」

『デュエル!!』

「先攻は俺だ！ドロー！」

ふっ、この手札なら直ぐに終わるぜ！

「先ずは手札から《ゴブリン突撃部隊》を召喚！」

ＡＴＫ　２３００

「さらに魔法カード《二重召喚》を発動！俺はこのターン、もう一度通常召喚出来る！俺は《ゴブリンエリート部隊》を召喚！」

ＡＴＫ　２２００

「攻撃力２０００以上のモンスターが二体！こいつ……どうやら口だけじゃないみたいだぜ……」

へっ！俺にかかればこの程度のことなど造作も無い！あのガキもさぞビビって……

「終わったか？なら早くターンエンドしろ」

くっ！このガキ！すかした顔しやがって！絶対ぶっ殺してやる！

「俺はカードを二枚伏せ、ターンエンド！」

男　手札→1枚

「俺のターンだな。ドロー！俺は魔法カード、《召喚師のスキル》を発動！デッキからレベル5以上の通常モンスターを手札に加える。俺が手札に加えるのは……《ブラック・マジシャン》！」

「何⁉　《ブラック・マジシャン》だと⁉　」

バカな⁉　あのカードは伝説のレアカードの筈……なんでこんなガキが持っていやがるんだ！

「更に魔法発動！《古のルール》！手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する！現れろ！我が忠実なる僕……《ブラック・マジシャン》！」

ＡＴＫ　２５００

「これが……《ブラック・マジシャン》……」

だがこのデュエルに勝てば俺のものになる！サッサと片付けさせてもらうぜ！

「これが伝説のレアカードの1枚……《ブラック・マジシャン》！超カッコいいぜ！」

「行くぞ！《ブラック・マジシャン》で《ゴブリン突撃部隊》を攻撃！

黒・魔・導！」

２５００　２３００＝２００

４０００　２００＝３８００

「うぐ！この程度！」

「俺は《翻弄するエルフの剣士》を守備表示で召喚！」

ＤＥＦ　１２００

「カードを2枚伏せてターンエンド」

遊戯　手札→1枚

「やろう……調子に乗りやがって！俺のターン！」

ふん！このカードで一気にケリを付けてやるぜ！

「手札から装備魔法《デーモンの斧》を発動！《ゴブリンエリート部隊》に装備することによって、攻撃力を１０００ポイントアップする！」

ＡＴＫ　２２００→３２００

「攻撃力３２００⁉　《ブラック・マジシャン》の攻撃力を超えた⁉　」

「ふん！例え伝説のカードだろうと、攻撃力が超えられれば無意味だ！行け！《ブラック・マジシャン》を破壊しろ！」

「ふっ、それはどうかな？」

「何？」

「罠カード、《シフトチェンジ》！自分のモンスターが攻撃、またはカード効果の対象になった時、別のモンスターに変更できる！俺は攻撃対象を《ブラック・マジシャン》から《翻弄するエルフの剣士》に変更する！」

なんだと⁉　ちっ、避けられたか。《翻弄するエルフの剣士》は攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。だがこんな方法もあるんだよ！

「永続罠《最終突撃命令》を発動！場の全てのモンスターは攻撃表示となり、表示形式の変更は出来ない」

「うまい。たとえ戦闘で破壊できなくても、攻撃表示になれば戦闘ダメージは与えられる」

「それだけじゃない。《ゴブリンエリート部隊》には攻撃後バトルフェイズ終了時に守備表示になるデメリットがある。あのカードが発動している限り、そのデメリットは無くなる」

「まだだ！罠カード発動！《ライジング・エナジー》！手札を1枚捨て、《ゴブリンエリート部隊》の攻撃力を更に１５００アップする！」

ＡＴＫ　４７００

「これが通れば貴様のライフはわずかに７００！俺の勝ちは決定的だ！」

「遊戯！」

「……」

４７００　１４００＝３３００

「はっはっはっはっ!!　貴様の様なガキにこの俺が倒せるわけがないんだよ！」

「遊戯……」

「ふっ、この程度で勝ち誇るなんてな。所詮はエセデュエリストか……」

「何!?　」

遊戯　ＬＰ４０００

な、何故だ!?　なぜライフが減っていない！

「俺は手札から《クリボー》の効果を発動していた」

《クリボー》……だと!?

「このカードは手札から捨てることにより、自分の受ける戦闘ダメージを０にする」

「ちぃ！往生際の悪い奴だ！ターンエンド！」

ＡＴＫ　３２００

男　手札→０

「だけどあの男の場には攻撃力３２００の《ゴブリンエリート部隊》がいる。簡単には突破できないぜ？」

「だけど彼の目を見て？彼はこのターンで一気に仕掛けるつもりだ」

「なっ⁉　このターンでだって⁉　遊戯の奴……一体どうするつもりなんだ？」

「俺のターン……ドロー！……どうやらもう終わりのようだな」

「へっ！やっと理解しやがったか！」

「ああ。ただし……お前の敗北でな！」

「何⁉　」

「手札から魔法カード《死のマジックボックス》を発動！お前の場のモンスター、《ゴブリンエリート部隊》を破壊して俺の場のモンスターを相手の場に移す！」

「何だと⁉　しまった！《ゴブリンエリート部隊》が⁉　」

「そして俺の場の《翻弄するエルフの剣士》をお前の場に移す！」

くっ！俺のモンスターが破壊されたか……だが《翻弄するエルフの剣士》は《ブラック・マジシャン》の攻撃では破壊されない！まだ望みは……

「お前に次のターンは来ない！永続罠《洗脳解除》を発動！このカードがある限り、全てのモンスターのコントロールは元々の持ち主の場に

戻る！」

なっ⁉　って事は⁉

「そうか！《死のマジックボックス》の効果で相手場にコントロールを奪われたとしても！」

「あのカードがある限り自分の場に戻って来るって訳だね」

「ば、バカな……。この俺が！こんな奴に！」

「行くぞ！《ブラック・マジシャン》！《翻弄するエルフの剣士》！2体でダイレクトアタック！」

バカなぁ～～⁉

２５００　１４００＝３９００

３８００　３９００＝－１００

ｗｉｎ　武藤遊戯

遊戯すげぇ……1もダメージを食らわずに勝っちまった……

「クソ⁉　こんなバカな⁉　こんな小便くせぇガキに！」

「約束だ。もう二度と他人に迷惑はかけるな」
「はっ！そんな約束はした覚えはねぇな！」
「なっ⁉　お前きたねぇぞ！」
「うるせぇ！俺がこんなガキに負けるわけねぇんだ！」
　こいつ！最初から約束を守る気なんか無かったな！
「……やはりか」
「ああ？」
「お前からは闇の力を感じる。元々はそんな奴じゃなかった筈だ」
「テメェ……何を言ってやがる！」
「お前の心の悪を砕く！マインド・クラッシュ！」
「ぐあっ！なんだこの感じは！うっ！ぐうっ……」
　男は頭を抱えながらその場に倒れこんだ。遊戯は一体何をしたんだ？
「うっ！ぐっ！ん？ここは……」
　男は起き上がった。しかし何やら様子が変だ
「俺は……今まで何を……」

「おい！何も覚えてないのか？」

「ああ……俺は確か2日ほど前に森を歩いていて……それから記憶が……」

「そうか……」

一体どうなってるんだ？さっきここでデュエルした事覚えてないなんて……

「この男は一種の洗脳にかかっていたらしい。操られてからの記憶は全く無いだろう」

遊戯……お前は一体なんなんだ？なんでそんなことがわかる？

「……疲れただろう！お前はそろそろ帰るといい」

「は、はい！分かりました！失礼します！」

男は少しビビりながら走って帰っていった。遊戯が怖かったのか？

「……ふぅ」

また遊戯のペンダントの様なものが光り、元の弱々しい遊戯に戻った

「ありがとう。助かったよ。僕は森近霖之助。君は？」

「あっ！僕は武藤遊戯。よろしくお願いします、霖之助さん」

「こちらこそ」

こーりんと遊戯は互いの名前を言い握手した

「何かお礼をさせてほしいんだけど……そうだ！チョット待ってて！」

こーりんは何かを思い出したように奥へと走って行った

「お待たせ。このカードパックを君にあげるよ」

「えっ？良いんですか？」

「うん。せめてものお礼だよ。勿論お代は入らないよ」

「ありがとうございます！大事に使わせてもらいます」

「喜んで貰えたようで何よりだよ」

「なあなあ！私にも……」

「君はダメだ」

ちぇ～、こーりんのケチ……

それにしても遊戯のさっきの姿は一体何だったんだ？なんか気になるな……

正義のＨＥＲＯ、子供達を守れ

「ふぁあ……。よく寝たぁ……。」

「起きたか。十代」

「お？ユベルか。おはよう」

「ああ、おはよう……と言っていい時間なのかい？」

「え？」

ユベルに言われて俺は時計を見る。すると針は１１時を指していた

「まだ朝だから大丈夫じゃね？」

「全く……君は幻想郷に来ても相変わらずだな」

あっ、そう言えば俺って昨日から幻想郷に来てたんだっけ？すっかり忘れてたぜ……

「まぁ、そこが君の良いところなのかもしれないけどね……」

俺のいいとこれかぁ……そう言うのはイマイチよくわかんねぇんだよなぁ……

俺とユベルで他愛もない話をしていると障子が開き、妖夢が入ってきた

「あっ、十代さん。起きてたんですね？」

「ああ、おはよう」

「おはようございます。でももうすぐお昼ですよ？そろそろ起きて食事をしていただかないと片付けが出来ないので……」

「悪い悪い、今から行くよ」

「服はここに置いておきますので着替えたら来てください。布団は私が片付けますので。」

「分かった、ありがとう」

妖夢はそう言うと一礼して障子を丁寧に閉めて戻って行った。律儀な奴だな……

「さて、着替えたら行くか」

俺は何時もの服に着替え、妖夢の待っている部屋へと向かった。妖夢はその後、再び俺の部屋に片付けに行った。その間、俺は飯を食っていいと言われたので食べ始めた

少年食事中…

「ふぅ……ご馳走様！」

「はい、お粗末様でした」

いやぁ！妖夢の飯はメチャクチャ美味いなぁ！これはレッド寮の

エビフライ並みの美味さだぜ！

「それにしても幽々子様……昨日から帰ってきてませんがどうしたんでしょうか？」

「幽々子さん帰ってきてないのか？」

「はい。何時もだったらお腹が空いたら帰ってくるはずなんですが……」

幽々子さんって子供みたいだな……

「ところで十代さん」

「ん？どうした？」

「十代さんはこれからどうするんですか？」

これからか……特に考えてなかったな……。第一この幻想郷についても何一つわかってない状態だしな

「良ければこの幻想郷を少し案内しましょうか？」

「えっ？良いのか⁉　」

「はい。それに十代さんはデュエリストなんでしょう？」

「そうだけど、なんで知ってるんだ？」

「昨日少し掃除していたら十代さんのデッキが見つかったんです。中身は見ていないので安心してください」

俺は別に中身を見られても問題無いが、人のデッキを勝手に見ないって事は妖夢は良いデュエリストだな

「それでどうします？ここからでしたら人里に歩いて３０分程度で着きますが」

そうだな……この世界について知っておいた方が良さそうだしな

「じゃあ、案内を頼もうかな」

「はい！任せてください！」

こうして俺たちは人里に行く準備をしてから向かう事にした。大徳寺先生とフャラオはここに残るみたいだ。どうやらこの冥界が気に入ったらしい。大徳寺先生が幽霊だからか知らないけど……

そして数分後……

「よし！じゃあそろそろ行くか！」

「はい！」

俺たちは出かける準備ができたので、人里を目指して歩き出した。人里ってどんなところなんかなぁ！ワクワクするぜ！

少年少女移動中…

よっしゃ！無事人里に着いたみたいだぜ！

「ではまず何から見たいですか？」
「そうだなぁ……カードショップってあるのか？」
「はい。あそこがそうです」
へぇ。あれがカードショップか……。この世界にはどんなカードがあんのかなぁ！
「では入りましょうか」
「おう！」
俺たちはカードショップの扉を開け店内に入った。アカデミアの購買部とは違い、カードも単品で置いてあり、カードパックの数も数え切れないほどある
「スゲェ！この世界にはこんなにも沢山のカードがあるのか！」
あっ？これは遊星の使ってたシンクロモンスターってヤツだな！ん？これはなんだ？
「なぁ妖夢。この黒いカードってなんだ？」
「ああ、それはエクシーズモンスターって言って同じレベルのモンスターを2体以上重ねて召喚するモンスターです。十代さんの世界には無かったんですか？」
「まぁな。どうやらこの世界のデュエルは俺の世界よりも遥かに進化しているみたいだな」

それにしてもエクシーズモンスターか……俺もいつか使ってみてぇな！

「ああ！僕のカード返してよぉ！」

ん？何かあったのか？

「へっ！こんな強いカード、テメェみたいなガキには勿体ねぇ！俺が有意義に利用してやるぜ！」

その場に行ってみると子供のカードを1人の男が一方的に取り上げていた。人のカードを取り上げるなんて許せねぇ！

「くっ！子供のカードを取り上げるなんて！ここは私が……」

「いやっ、ここは俺に任せてくれ」

「十代さん？」

人の……ましてや子供の夢を奪う奴は許す訳には行かねぇ

「グスッ……。あれはお姉ちゃんから貰った大事なカードなのに……」

「おい！そこのお前！」

「あん？もしかして俺のことか？」

「もちろんだ。お前……子供のカードを奪うなんて恥ずかしいとおもわないのか！」

「はっ！なんだ？いっちょ前に正義の味方気取りかよ。貴様みたいなやつは見ていて反吐が出んだよ！」

「その言葉……お前にそのまま返すぜ！」

「お兄ちゃん！僕もあの人にカードを取られたんだ！」

「私も一番大好きなカード取られたよ！」

「僕のお気に入りのカードも……」

「何⁉　」

こいつ……とことん腐ってやがるぜ！

「おい！俺とデュエルしろ！もし俺が勝ったらこの子達から奪ったカードは返してもらう！」

「いいだろう。ただし俺が勝ったら……お前のフェイバリットカードはいただくぜ？」

「……分かった。その条件を呑もう」

「なっ⁉　十代さん！それでは貴方が負けたら貴方のカードが！」

「大丈夫だ。俺は負けない」

俺は元から負けるつもりなんてない。どんな奴が相手でも必ず勝つ！

「クックック。さっき奪ったカードでボコボコにしてやるぜ」

「さぁ！さっさと始めようぜ！」

『デュエル!! 』

ＬＰ　４０００ＶＳ４０００

「先攻は俺だ！ドロー！」

この手札ならまだ様子見か……

「俺は《Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン》を守備表示で召喚！」

ＤＥＦ　２０００

「守備力２０００ですか。これなら簡単には突破できないですね……」

「凄い！【Ｅ・ＨＥＲＯ】だ！」

「カッコいい！」

子供達がヒーローの格好良さに反応してるぜ。やっぱ子供には永遠の憧れだよな！

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド！」

十代　手札→４枚

「なんだ？さっきの威勢とは随分違って消極的じゃねぇか」

「慌てるなよ。デュエルは始まったばかりだ」
「減らず口を……今黙らせてやるぜ！俺のターン、ドロー！」
奴は一体どんな手でくる？
「俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！」
ＤＥＦ　２４００
レベル５のモンスターをリリース無しで召喚だと？《サイバー・ドラゴン》の様なものか？
「《バイス・ドラゴン》は相手の場にのみモンスターがいる場合、攻守を半分にする事により手札から特殊召喚出来る！」
ＤＥＦ　２４００→１２００
「更に俺は《バイス・ドラゴン》をリリースし、《ストロング・ウィンド・ドラゴン》をアドバンス召喚する！」
ＡＴＫ　２４００
「まずい！あのモンスターの効果は……」
「後悔しても遅いぜ？このカードはドラゴンをリリースしてアドバンス召喚した場合、リリースしたドラゴンの元々の攻撃力の半分の数値を加える！」
「何⁉　」

《バイス・ドラゴン》の元々の攻撃力は２０００……。それの半分は１０００……。って事は！

ＡＴＫ　２４００→３４００

「攻撃力……３４００……

「まだだぁ！このカードは守備モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば貫通ダメージを与える！」

「なんだと⁉　」

「行け！《ストロング・ウィンド・ドラゴン》！奴のモンスターを消し去れ！ストロング・ハリケーン！」

３４００　２０００＝１４００

４０００　１４００＝２６００

「うっ！へへっ……結構効いたぜ……」

まさか1ターン目からこれだけのダメージを食らうなんてな……

「お兄ちゃん！大丈夫⁉　」

「ああ！俺は全然平気だぜ！」

「ふん！いつまで持つかな？」

「たとえヒーローは敗れても、その意思は別のヒーローへと受け継がれる！リバースカード、《ヒーロー・シグナル》！」

「何⁉　」

「自分のモンスターが戦闘で破壊された時、デッキからレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯを一体特殊召喚出来る！俺が呼び出すのは……来い！スパークマン！」

ＡＴＫ　１６００

新しいヒーローの登場に子供達はますます興奮している。ヒーローに夢を見てくれる子供達のためにもこのデュエル……絶対に負けない！

「カッコつけやがって……。俺はこのままターンエンド！」

男　手札→４枚

「今度はこっちの番だ！俺のターン！ドロー！」

よし！これなら奴にダメージを与えられる！

「先ずは手札から装備魔法、《スパークガン》をスパークマンに装備！このカードを装備したスパークマンは、３回まで表側モンスターの表示形式を変更できる！」

「なっ⁉　」

ＡＴＫ　３４００→ＤＥＦ　１０００

「しまった！《ストロング・ウィンド・ドラゴン》の守備力はわずかに１０００！スパークマンの攻撃力を下回っている！」

「そして魔法カード、《Ｈ―ヒートハート》を発動！このカードは自分のモンスター一体の攻撃力を５００ポイントアップさせ、守備モンスターを攻撃した時にその守備力を攻撃力が超えていれば、貫通ダメージを与える効果を追加する！」

ＡＴＫ　１６００→２１００

「何⁉　貴様も貫通効果だと⁉　」

「凄い！お兄ちゃんのマジックコンボだ！」

「行け！スパークマンで《ストロング・ウィンド・ドラゴン》に攻撃！スパーク・フラッシュ！」

２１００　１０００＝１１００

４０００　１１００＝２９００

「ぐあぁ！貴様……よくも！」

「俺はこれでターンエンド！」

ＡＴＫ　２１００→１６００

十代　手札→３枚

「俺のターン……ドロー！……⁉　くっふっふっふ。はっはっはっはっは！」

？一体どうした？何かいいカードでも引いたのか？

「これで貴様もお終いだ！先ずは手札から魔法カード、《死者蘇生》を発動！墓地のモンスター……《バイス・ドラゴン》を復活させる！」

ＡＴＫ　２０００

何故《バイス・ドラゴン》なんだ？ここは攻撃力の高い《ストロング・ウィンド・ドラゴン》のほうが良いはず……

「更に永続魔法《アドバンス・フォース》！このカードがある限り、レベル７以上のモンスターはレベル５以上のモンスター１体をリリースする事でアドバンス召喚する事が出来る！」

成る程。これがあるから《バイス・ドラゴン》でも良かったわけだな

「現れよ！《青氷の白夜龍》！」

ＡＴＫ　３０００

「なっ⁉　《青氷の白夜龍》だと⁉　」

このカードは確か明日香が光の結社に入った時に使っていたモンスター……。まさかまた闘う事になるなんてな！

「更に俺は装備魔法《巨大化》を発動！」

「何⁉　」

《巨大化》は確か自分のライフが相手より下なら攻撃力を２倍にするが、相手より上の場合は半分になるはずだ。一体何を考えて……⁉

まさか!?

「俺が装備魔法の本当の使い方を教えてやるぜ！このカードをスパークマンに装備する！」

しまった！《巨大化》の効果が決まるのはこのカードの持ち主のライフ！装備魔法は相手にもつけられるからそれを利用されたか……

ＡＴＫ　１６００→８００

「消え去れ！《青氷の白夜龍》で雑魚モンスターを粉砕！」

３０００　８００＝２２００

２６００　２２００＝４００

「ぐあああああぁぁぁぁ!!　!!

「はっはっは！どうだ！サレンダーする気になったか？」

「へっ……へへへ……」

「あ？恐怖で頭おかしくなったか？」

「いや。楽しいんだよ。こんな強い相手とデュエル出来るなんて……超ワクワクするぜ！」

「何？貴様は正気が？俺の場には攻撃力３０００の《青氷の白夜龍》。だが貴様の場にモンスターは無くライフもわずか４００。この状況でまだ諦めないのか！」

「当たり前だろ？だって次のドローで世界が変わるかもしれねぇだろ？そう思ったらワクワクしねぇか？」

「はん！たった1枚のドローでこの戦況を覆せるわけがない！」

「だったら引いてみるまでだぜ！」

「十代さん……」

「お兄ちゃん……」

さぁ、頼むぜ！俺のデッキ！

「俺の……ターン！」

……⁉　よっしゃ！来てくれたぜ！

「俺が引いたのは……魔法カード！《融合》！」

「何⁉　《融合》だと⁉　」

「俺は手札のフェザーマンとバーストレディを融合！さぁ来い！マイフェイバリットヒーロー！《Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン》！」

ＡＴＫ　２１００

「融合モンスターだと⁉　だがそのモンスターでは俺の《青氷の白夜龍》の攻撃力には及ばない！」

「だったらあんたに教えてやるぜ！ヒーローにはヒーローに相応し

い、闘う舞台ってもんがあるんだ！フィールド魔法《摩天楼　―スカイスクレイパー―》発動！」

「な、なんだここは！」

「行け！フレイム・ウィングマン！《青氷の白夜龍》を攻撃！」

「なっ⁉　フレイム・ウィングマンの攻撃力は《青氷の白夜龍》の攻撃力より下なんですよ⁉　一体何を考えているんですか⁉　」

「バカめ！勝てないと分かって自滅しに来たか！」

「誰がそんな事するかよ！《摩天楼　―スカイスクレイパー》の効果！E・HEROが自分よりも攻撃力の高いモンスターに攻撃する時、攻撃力を１０００ポイントアップする！」

「なっ⁉　」

ＡＴＫ　２１００→３１００

「攻撃力３１００……だと⁉　」

「スカイスクレイパー・シュート！」

３１００　３０００＝１００

２９００　１００＝２８００

「ぐっ⁉　だがまだ俺のライフは……」

「お前に次のターンは回ってこないぜ。フレイム・ウィングマンの効

果は戦闘で相手モンスターを破壊した時、その破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「なん……だと……？」

「《青氷の白夜龍》の攻撃力は３０００。そしてあの人ライフは残り２８００。って事は！」

「やった！お兄ちゃんの勝ちだ！」

２８００　３０００＝－２００

「ぐあああああぁぁぁぁ⁉　」

ｗｉｎ　遊城十代

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

（ほう？流石はキング・オブ・デュエリストの１人……。この男では役不足だったか……）

⁉　……今の感覚は……

「お兄ちゃん！凄かったよ！」

「うんうん！とってもカッコよかった！」

「ん？そうか？」

「お疲れ様です。十代さん」

「おう！」

「十代。感じたかい？今の……」

ああ。一瞬だけだがこの男から深い闇の力を感じた……

「つまりこの男は何者かに操られていた……」

その可能性は充分にあるな……

「うっ！……うん？」

どうやら気がついたみたいだな。どうする？直接聞いてみるか？

「いや、相手もバカでは無いだろう。流石に操った者の記憶くらいは消しているだろう」

聞くだけ無駄ってわけか……仕方ないな。とりあえずは子供たちのカードは取り返したし良しとするか……

「そうだな」

「あれ？僕はここで何を……」

「忘れたのか？小便行く途中だっただろ？早く行かないと漏れちまうぜ？」

「そ、そう言われると行きたいような……ヤバイ⁉　漏れる！」

男は俺の言った嘘に騙され急いで店を出て行った

「あの人どうしたんですか？」

「さぁ？何か急ぎの用事があるみたいだぜ？」

「十代。これでよかったのか？」

いいんだよ。他に方法は無かったし、何よりヤバそうなことに妖夢まで巻き込む訳にはいかないだろ？

「ふっ。君らしいな」

こうして俺は子供たちにカードを返し一緒にデュエルもした。日が沈み始め夕方になった頃、デュエルを切り上げて白玉楼へと帰ることにした

「お兄ちゃん！またデュエル教えてね！」

「おう！わかってるよ！」

「すっかり人気者ですね」

「俺自身子供が嫌いな訳じゃないから別に問題は無いさ。さぁ！早く帰ろうぜ！俺もう腹が減りすぎて死にそうだぜ……」

「そうですね。では私が腕によりをかけて作りますので期待しててください！」

「ああ！楽しみにしてるぜ！」

俺たちが白玉楼に帰ろうとしている時、少しきになる話を耳に挟んだ

「なぁ、あいつのデュエル見たか？」

「ああ、あの青い皮ジャンの服を着た男だろ？あれは凄かったよなぁ」

へぇ～。他にもデュエルしてた奴がいたのか。凄いやつかぁ……

俺もそいつとデュエルしてみてぇな！

伝わる思い、カードとの絆

「遊星さん！」

「な、なんだ？」

「人里に行きましょう！」

「人里？」

俺が食事を済ませ片付けの手伝いをしていると、突然早苗が人里に行こうと言い出した

「突然どうしたんだ？」

「ここは腐っても神社なんです！少しでも多くの信仰を集めなければ！」

「勝手にうちの神社を腐らせないでよ……」

諏訪子が早苗にツッコミを入れる

「でもなんで今なんだ？別に時間はあるんだから後でもいいんじゃ……」

「善は急げと言うでしょう？さぁ！早く行きますよ！」

「分かったから引っ張らないでもらえるか？すぐ準備するから……」

龍亜以上に強引だな……。だがこの世界について何も知らないし

……。いい機会なのかもな

「ゴメンね？遊星君。うちの早苗が迷惑かけて……」

「いや、俺は別に気にして無いさ。それに人里に行くのも俺にとっても悪い事じゃない」

「ありがと。早苗は遊星君と一緒に過ごせて嬉しいんだと思うよ？なんたって君のファンなんだからさ」

そう言えばジャックも言ってたな……。『キングたるもの、ファンの期待に応えなければ存在する意味など無い』
って

「そうだな……。じゃあすまないが少し付き合ってくるよ」

「うん。早苗の事お願いね？」

「ああ、分かったよ」

俺は外で待っている早苗に合流し、人里へと向かった

少年少女移動中…

「ここが人里か？」

「はい！ここの住人たちに話しかけて神社に勧誘するんです！」

何かおかしくないか？いや……この世界ではこれが常識なのか？

「では早速……すいません！守矢神社のものですけど！」

……セールスみたいになってるな

その後早苗の勧誘によりそこそこの信仰が集まったようだ。俺から見ていると半分強引に引き入れていたように感じたが……

「ふぅ……今日はこんなところですかね……」

「終わったのか？」

「はい！今日も中々良い収穫でした！」

早苗は軽く汗を拭う仕草をして言う。俺が付いて来た意味はあったのか？

「では次は遊星さんの見たいものがありましたら案内しますよ？」

「いいのか？」

「ええ、遊星さんにわざわざ付いて来ていただいたのでそのお詫びです」

「ふっ、そうか」

少し走り過ぎるところはあるが、人間としては悪いわけではないんだな

「じゃあここにジャンク部品の置いてある店は無いか？」

「ジャンクですか？」

「ああ。俺のDホイールを修理したくてな」
「そうですか。でも残念ながらここにはありませんね」
「そうか。仕方がないな」
「ですが妖怪の山にいる河童のにとりさんなら力になれるかもしれませんよ？」
「何？」
河童だと？河童にそんな技術があるのか？後で訪ねてみるか……
「では後で寄ってみましょうか？」
「そうだな……」
俺たちが次の事を決めていると……
「止めてくれよ！」
「⁉　今のは？」
「あっちからですね。行きましょう！」
「ああ」
誰かの声が聞こえ、気になった俺たちはその場所へと向かった……
「⁉　あれは⁉　」

1人の子供が泣いていた。その前には女が立っていてカードを踏みつけている

「なぁ、一体何があったんだ？」

俺はその様子を見ていた男性に尋ねた

「ん？あの女が子供にデュエルを挑んでね。そしてクズカードだのなんだの言ってあの子のカードを踏みつけ始めたんだよ」

「なんだと？」

この光景……この状況……まるであの時のサテライトのようだ。まさかこの世界でもあんな奴らがいるなんて……

「子供にあんなことをするなんて！酷すぎます！って遊星さん⁉　どこ行くんですか！」

「少しあいつに用事がある」

俺は早苗にそう告げると子供の元へ向かった

「こんなクズばかりでよくデュエルしようなんて思ったね？」

「く、クズじゃないよ！どのカードも僕の大切な友達なんだから！」

「カードが友達？笑わせるんじゃないよ！カードは所詮カード……ただの道具にしか過ぎないのさ」

「おい」

「ああ？誰だい？あんたは」

「デュエルしろよ」

「はっ？この私とデュエル？あんたは私の事が誰か知っているのかい？」

「ふっ、人のカードにいちゃもんつける事しか出来ないエセデュエリストだろう？」

「あんた……死にたいのかい？」

俺は子供の横に立ち奴にデュエルを申し込んだ。そして奴を挑発するとすぐに逆上した

「いいだろう。あんたの望み通り……デュエルを受けてやろうじゃないか」

「そう来なくてはな」

「遊星さん！そんな女吹っ飛ばしちゃってください！」

俺は早苗の声に軽く頷きデュエルディスクを構えた

「さっさとケリを付けてやるよ！」

「行くぞ！」

『デュエル!! 』

ＬＰ　４０００ＶＳ４０００

「私のターンからよ。ドロー！……ふふふ、これならすぐに終わるわね。私は手札から魔法カード、《手札断殺》を発動！互いに手札を２枚捨てて２枚ドローするよ」

まずは手札交換か。だが今の俺にもメリットはある

遊星
ロードランナー
シールド・ウォリアー

女
魔轟神　ソルキウス
ミスト・デーモン

「そして墓地の《魔轟神　ソルキウス》の効果を発動！手札を２枚墓地へ送りこのカードを特殊召喚出来る。来い！ソルキウス！」

ＡＴＫ　２２００

捨てたカード
死霊騎士　デスカリバーナイト
トランスデーモン

「まだだよ、さらに私は《ヘル・セキュリティ》を召喚！」

ＡＴＫ　１００

「チューナーモンスター……シンクロ召喚か」

「その通り、レベル６の《魔轟神　ソルキウス》にレベル１の《ヘル・

セキュリティ》をチューニング！深淵より生まれし死神よ、死を司る鎌で全ての者を死へと誘え！シンクロ召喚！滅せよ、《天刑王　ブラック・ハイライダー》！」

ＡＴＫ　２８００

「いきなり攻撃力２８００⁉　しかもあのモンスターの効果は遊星さんにとって……」

「ブラック・ハイライダーが場にいる限り、互いにシンクロ召喚は行えない。あんたが何デッキを使うかは知らないが、これで１つの戦略は潰れた。私はこれでターンエンド」

女　手札→２枚

俺のデッキの主戦力はシンクロモンスター……だがシンクロモンスターだけが全てではない！

「俺のターン、ドロー！」

この手札ではまだ動けないな……

「俺はカードを２枚伏せる。そして１枚の罠カードを墓地へ送ることでこのカードを攻撃表示で特殊召喚出来る！来い、《カード・ブレイカー》！」

ＡＴＫ　１００

「更に墓地へ送った《リミッター・ブレイク》の効果発動！このカードが墓地に送られた時、デッキ・手札・墓地から《スピード・ウォリアー》を特殊召喚出来る！」

ＡＴＫ　９００

「最後に《ゼロ・ガードナー》を召喚」

ＡＴＫ　０

「これで俺はターンエンド」

遊星　手札→2枚

「ふん、そんな雑魚モンスター達を出すんだったら守備表示で出すんだね」

「ふっ、だったらすぐに俺を倒してみるんだな」

「チッ、とことんなめたガキだね。望み通りすぐ楽にしてやるよ。私のターン、ドロー！」

「トラップ発動！《捨て身の宝札》！自分の場に攻撃表示のモンスターが2体以上いる時発動でき、そのモンスター達の攻撃力が相手の場の攻撃力の一番低いモンスターの攻撃力より下回っていた場合カードを2枚ドロー出来る！攻撃力の合計は１０００。対するブラックハイライダーの攻撃力は２８００。よって2枚のカードをドロー！」

遊星　手札　2枚→4枚

「その為だけに低レベルモンスター達を攻撃表示で出したのかい？まるでデュエルの素人だね」

「いや、《ゼロ・ガードナー》の効果は確か……」

「私は《マッド・デーモン》を召喚！」

ＡＴＫ　１８００

「《マッド・デーモン》で《スピード・ウォリアー》を破壊する！ボーン・スプラッシュ！」

「そう簡単に通させはしない！《ゼロ・ガードナー》の効果発動！このカードをリリースする事で、このターン俺のモンスターは戦闘では破壊されず、全ての戦闘ダメージを０にする！」

「へぇ、少しは考えがあったみたいだね。さっきの言葉は訂正しておくよ」

意外と素直な奴だな。こちらも少しだけ訂正しておくか

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

女　手札→1枚

「俺のターンだな。ドロー！」

よし！来てくれたか！

「俺は《カード・ブレイカー》をリリースし、《サルベージ・ウォリアー》を召喚！」

ＡＴＫ　１９００

「《サルベージ・ウォリアー》の効果発動！このカードのアドバンス召

喚に成功した時、手札か墓地からチューナーモンスターを特殊召喚出来る！俺は手札の《ジャンク・シンクロン》を召喚！」

ＡＴＫ　１３００

「チューナーモンスター？そんなモンスターを出しても私のブラックハイライダーがいる限りシンクロは出来ないよ」

「分かっているさ。だが俺の狙いは違う。俺は《サルベージ・ウォリアー》をリリースし、《ターレット・ウォリアー》を特殊召喚！」

ＡＴＫ　１２００

「このカードは戦士族モンスターをリリースする事で特殊召喚する事ができ、リリースしたモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップする」

ＡＴＫ　１２００→３１００

「何⁉　攻撃力３１００だと⁉　」

「これならブラックハイライダーも倒せます！さすが遊星さんですね！」

「くっ、こうもあっさりブラックハイライダーを攻略するなんてね……」

「悪いな、俺は今までにシンクロキラーとのデュエルを経験していてね」

「何？」

俺はあの時とは違う……。もう何も恐れない……。自ら前に進み未来を掴み取る！

「行くぞ！《ターレット・ウォリアー》で、《天刑王　ブラック・ハイライダー》を攻撃！リボルビング・ショット！」

３１００　２８００＝３００

４０００　３００＝３７００

「くっ⁉　この程度……」

「続いて《スピード・ウォリアー》で《マッド・デーモン》を攻撃！」

「なんで⁉　《スピード・ウォリアー》の攻撃力は《マッド・デーモン》の攻撃力よりも低いんですよ⁉　」

「いや、そんな事は無いさ」

「えっ？」

ＤＥＦ　０

「ど、どうして《マッド・デーモン》の表示形式が？」

「気付いていたのか。《マッド・デーモン》は攻撃対象となった時、強制的に守備表示となる」

「ああ、俺の友人も同じカードを使っているからな。行け！《スピード・ウォリアー》！ソニック・エッジ！」

ＤＥＦ　０　ＶＳ　ＡＴＫ　９００

「チッ」

「更に《ジャンク・シンクロン》でダイレクトアタック！」

３７００　１３００＝２４００

「うぐっ」

「よし！これで相手の場はガラ空き！あの状況を打破するなんて凄いですよ！」

「調子に乗らないことだね。私は手札の《トラゴエディア》の効果を発動！自分がダメージを受けた時にこのカードを手札から特殊召喚出来る。更にトラップカード、《ダメージ・ゲート》。自分が受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスターを一体、自分の場に特殊召喚出来る。私は《ヘル・セキュリティ》を特殊召喚！」

ヘル・セキュリティ
ＡＴＫ　１００

トラゴエディア
ＡＴＫ　？

「《トラゴエディア》の攻撃力・守備力は私の手札の数　６００となる。だが、私の手札は０。よって攻撃力も０となる」

ＡＴＫ　？→０

わざわざチューナーモンスターを復活させた？レベル１１のシンクロモンスターなんているのか？

「俺はレベル２の《スピード・ウォリアー》にレベル３の《ジャンク・シンクロン》をチューニング！集いし星が、新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！いでよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

ＡＴＫ　２３００

「俺はこれでターンエンド」

遊星　手札→２枚

「あんたもシンクロモンスターを使うのかい。なら私も切り札を出すとしようかね。私のターン、ドロー！」

奴のエースはブラックハイライダーじゃあ無かったのか？一体何を出してくる？

「私はトラゴエディアの効果を発動。自分の墓地のモンスター一体を選択し、選択したモンスターとレベルを同じにする」

「何⁉」

あいつの狙いはこれだったのか……

「私が選択するのはレベル７の《天刑王　ブラック・ハイライダー》だ！」

トラゴエディア
レベル　１０→７

「そしてレベル7の《トラゴエディア》にレベル1の《ヘル・セキュリティ》をチューニング！地獄を燃やす紅蓮の炎。悪魔に宿いて弱者を全て焼き尽くせ！シンクロ召喚！破壊せよ、《琰魔竜　レッド・デーモン》！」

ＡＴＫ　３０００

「なっ⁉　レッドデーモンズ⁉　」

いや、少し違う。何よりシグナーの力を感じない……

「さあ、絶望せよ。レッド・デーモンの効果を発動！1ターンに一度、このカード以外の全ての攻撃表示のモンスターを破壊する。真紅の地獄炎（クリムゾン・ヘル・バーン）！」

「くっ⁉　すまない、ジャンク・ウォリアー、ターレット・ウォリアー……」

「くらえ！レッド・デーモンでダイレクトアタック！極獄の裁き（アブソリュート・ヘル・ジャッチ）！」

ＬＰ　４０００　３０００＝１０００

「ぐあああああぁぁぁぁ⁉　」

くっ、さすがに今のは効いたな……

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

女　手札→0

「(今伏せたのは破壊神の系譜。例え守備モンスターを出してもレッド・デーモンの攻撃であいつは終わる)」

「俺のターン、ドロー!俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「なんだい?もう手詰まりかい?ならば今終わらせてあげるよ。ドロー!」

……奴はどう出てくる

「これで終わりだ!《琰魔竜　レッド・デーモン》!奴にトドメをさせ!」

「遊星さん!?　」

「……トラップ発動!《ロスト・スター・ディセント》!自分の墓地のシンクロモンスターを一体守備表示で特殊召喚する!来い!《ジャンク・ウォリアー》!」

ＤＥＦ　１３００

「ただしこの効果で召喚したモンスターの守備力は０となり、レベルは１つダウンする」

ＤＥＦ　１３００→０

「そんなモンスターを出したところで無駄だよ!私の伏せカードは《破壊神の系譜》。相手の守備モンスターを破壊したターン、私のレベル８のモンスターは２回攻撃できる。どう足掻いてもあんたは終わりだよ」

「そう思うなら攻撃してみな」

「ふん、望み通り終わらせてやるよ。レッド・デーモンで《ジャンク・ウォリアー》に攻撃！極獄の絶対独断（アブソリュート・ヘル・ドグマ）！」

ＤＥＦ　０　ＶＳ　ＡＴＫ　３０００

「遊星さん⁉　」

「これで終わりだよ！トラップカード……⁉　何故だ⁉　何故発動しない⁉　……ハッ⁉　何故《ジャンク・ウォリアー》が破壊されていない⁉　」

「俺は《ジャンク・ウォリアー》が攻撃された時に墓地の《シールド・ウォリアー》の効果を発動していた。墓地のこのカードを除外することで自分のモンスターを戦闘での破壊から守る」

「くっ、悪足掻きを……。私はカードを1枚伏せてターンエンド」

このドローで全てが決まる……。デッキよ……俺の声に答えろ！

「俺のターン……ドロー！」

……ッ⁉　？このカードは⁉

「これはあの時と同じ……。俺は《ブライ・シンクロン》を召喚！」

ＡＴＫ　１５００

スターダスト……もう一度力を貸してくれ！

「レベル４となった《ジャンク・ウォリアー》にレベル４の《ブライ・シンクロン》をチューニング！集いし願いが、新たに輝く星となる！光さす道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！」

ＡＴＫ　２５００

「なっ⁉　このモンスターは⁉　」

「スターダスト来たー！いつ見てもかっこいいドラゴンです！」

「スターダスト……伝説のレアカードの１枚……。何故こんな奴が？」

「《ブライ・シンクロン》を素材にしたシンクロモンスターはこのターン攻撃力を６００ポイントアップし、効果は無効となる」

ＡＴＫ　２５００→３１００

「レッド・デーモンの攻撃力を越えたか……」

「バトル！《スターダスト・ドラゴン》で《琰魔竜　レッド・デーモン》に攻撃！シューティング・ソニック！」

ＡＴＫ　３１００　ＶＳ　ＡＴＫ　３０００

「そう簡単に通させはしないよ。トラップカード、《ハーフｏｒストップ》！相手が攻撃してきた時、相手は次の効果から１つを選択して発動する。攻撃を中止するか、攻撃力を半分にするか！」

「……スターダスト、攻撃は中止だ」

「そうだ、あんたはそうせざるを得ない」

「カードを1枚伏せて、ターン・エンド」

遊星　手札→1枚

「このターンが本当の最後だよ！私のターン！《琰魔竜　レッド・デーモン》の効果を発動！全ての攻撃表示モンスターを破壊する！真紅の地獄炎！」

「……ふっ」

「？何を笑っている」

「俺はこの瞬間を待っていた！《スターダスト・ドラゴン》の効果発動！カードを破壊する効果が発動した時、このカードをリリースする事で無効にし破壊する！ヴィクテム・サンクチュアリィ！」

「何⁉　」

「やった！これでレッド・デーモンは場からいなくなった！」

「くっ、だけど私の手札には《デーモンの騎兵》がいる。あいつの体力は残り１０００……。こいつが決まれば！」

「いや、これで終わりさ。リバースカード、《コズミック・ブラスト》！自分の場のドラゴン族シンクロモンスターが場を離れた時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「なんだって⁉　」

「スターダストの攻撃力は２５００……。対するお前のライフは残り２４００。俺の勝ちだ」

「バカな……この私が……」

ＬＰ　２４００　２５００＝－１００

ｗｉｎ　不動　遊星

「やったー！遊星さんが勝ったー！」

なんとか勝てたな……。いつの間にか大勢の人が集まっているが……

「(なるほど……英雄の名は伊達では無いというわけか)」

「⁉　」

今の感覚……。ダークシグナーの時に似ていた……。まさか⁉

俺は少し気になり、さっきの女のデッキを確認してみた

やはり……。デッキの内容が全く違う……

「まさか……またダークシグナーやイリアステルの様な悲劇が繰り返されるのか？」

「どうしたんですか？遊星さん」

「早苗か……。いや、何でもない」

「？」

これは少し用心しておいた方がいいか……

竹林のデュエル、希望の戦士再臨

「このカードは入れたいけどするとこのカードは入らないし……」

「遊馬、何を悩んでいる」

「あっ⁉　アストラル！実は俺のデッキに入れるカードを悩んでてな……」

「君の望んだ通りに作るといい。そのデッキは君自身だからな」

俺自身か……。アストラルはいつも分かりにくい言い方するんだよなぁ……

「でも分かったよ。俺が望んだ通りにデッキを組むよ」

「うん。それでこそ遊馬だ」

「へへへ……」

やっぱりアストラルがいると気分が違うな。何ていうか楽しい気分や嬉しい気持ちを共有出来るって言うのかな？

「遊馬～。いる～？」

俺がアストラルと話していると鈴仙が部屋に入ってきた

「あっ、鈴仙か。どうした？」

「実はお師匠様に頼まれた薬を人里に渡して来いって言われたから今

から行くんだけど一緒に行かない？」

「永琳が？」

永琳って薬剤師だったのか？だけどいい機会だし俺も行くか

「分かった。一緒に行くか！」

「ありがとう。それじゃあ準備するから外で待ってて」

「おう！」

鈴仙に言われた通り俺は外で待ってることにした。

「ゴメン！待たせちゃって！」

「別にいいよ。じゃあ早速行こうぜ！」

暫くすると鈴仙が薬の入った袋を持ってやってきた。そして俺たちは人里に向かうことにした

少年少女移動中…

「……」

「遊馬……」

「……なんだ？」

「迷ったのか？」

ギクッ!?

「……迷ったんだな」

「ま、迷ってない！ただ鈴仙と逸れただけだ！」

「それを迷ったと言うのではないか？」

「うぐっ……」

そ、そう言えば鈴仙のやつこの竹林では逸れると必ず迷うって言ってたな……

「これからどうするか……」

「……遊馬。あっちから誰か来るぞ」

「えっ？」

アストラルがいった方向を見ると1人の男が立っていた

「……お前が九十九遊馬だな？」

「そうだけどあんたは？」

「……俺とデュエルしてもらう」

「デュエル？」

こいつは誰なんだ？急に俺とデュエルなんて……

「気をつけろ、遊馬。この男から何か嫌な雰囲気を感じる」
「わかった、アストラル。いいぜ！そのデュエル！受けてやるぜ！」
よっしゃあ！かっとビングだ！オレェ！
「デュエルディスク！セット！Dゲイザー！セット！」
『デュエル!!』
ＬＰ　４０００　ＶＳ　４０００
「先行は俺だ！ドロー！」
「遊馬、一つ君に伝えておく事がある」
「なんだよアストラル！折角カッコよく決めようと思ったのに！」
「何か違和感を感じて我々の所持しているナンバーズを全て確認したが……。効果が全て変更されている」
「何!?」
アストラルが言う通りホープの効果を確認したが、ナンバーズ特有のナンバーズにしか破壊されない効果が無くなり、ホープ自身の効果も変わっている
「恐らくこの世界に入った瞬間、この世界の仕様と同じになったのだろう」
「つまりこの世界ではナンバーズが中心の世界ではないって事だな

！」

「断定は出来ないがその可能性は充分にあるだろう」

よし！ならあの時のように命を賭けたデュエルとかアストラルが消える心配も無いんだよな！

「……だがこの世界のデュエルが安全なものだと思わない方が良いかもしれない」

「え？どういう事だよ」

「この世界が常に平和なのであれば、永琳が私たちをこの世界にわざわざ連れてきたりなどしないであろう」

そっか。そう言えば永琳は俺にこの世界を救って欲しいって言ってたな。だとしたらまたデュエルモンスターを悪用する奴らが出てきちまうかもしれねぇな。だったら俺が必ずこの世界を守ってやるぜ！

「……早くターンを進めろ」

「あっと、悪い悪い。じゃあ行くぜ！俺は《ガガガマジシャン》を召喚！」

ＡＴＫ　１５００

「更に魔法カード《ワンダー・ワンド》を《ガガガマジシャン》に装備！このカードは魔法使いにのみ装備でき、装備モンスターの攻撃力を５００ポイントアップさせる！」

ＡＴＫ　１５００→２０００

「そして《ワンダー・ワンド》のもう一つの効果発動！このカードと装備モンスターを墓地に送ることで、デッキからカードを二枚ドローする！」

よし……このカードなら！

「俺はカードを１枚伏せてターンエンド！」

遊馬　手札→５枚

「……俺のターン、ドロー」

さて、あいつは一体どんなデッキなんだ？

「……俺は《神獣王　バルバロス》を攻撃表示で召喚」

ＡＴＫ　３０００

「いきなり攻撃力３０００⁉　」

「落ち着け遊馬。強力なモンスターほどデメリットも共について歩くものだ」

「バルバロスはリリース無しで召喚出来るが、その代償として攻撃力が１９００に下がってしまう……」

ＡＴＫ　３０００→１９００

なんだよ、脅かしやがって……。でも攻撃力３０００のモンスター

を弱体化させてまで召喚したって事は手札に他のモンスターがいなかったのか？

「バトル。俺は《神獣王　バルバロス》で直接攻撃。スパイラル・ブラスト」

「へっ！そう簡単には通させないぜ！伏せカードオープン！《ピンポイント・ガード》！相手が攻撃してきた時、自分の墓地のモンスターを守備表示で特殊召喚する！来い！《ガガガマジシャン》！」

ＤＥＦ　１２００

「更にこの効果で特殊召喚したモンスターはこのターン戦闘、カード効果による破壊から免れる！」

「なるほど、だから君は最初に《ワンダー・ワンド》の効果で《ガガガマジシャン》をコストにしたのだな」

「……残念だがその効果、俺も利用させてもらう」

「何⁉　」

利用するだって⁉　一体何をするつもりなんだ⁉

「俺は手札から《ファントム・ドラゴン》の効果を発動。こいつは相手が特殊召喚を行った際に手札から特殊召喚出来るモンスター」

「なっ⁉　」

相手の行動を利用して効果を発揮するモンスター⁉　くっ……まさかそんなモンスターがいるなんて……

「来い、《ファントム・ドラゴン》」

ＡＴＫ　２３００

「お前がそのカードを使う事は大体分かっていた」

「何⁉」

「っ⁉　遊馬、彼は我々の事を知っているようだ。気をつけろ」

「ああ、分かっているぜ、アストラル。このデュエル……ぜってぇ負けねぇ！」

しかし相手の場にはレベル８のモンスターが２体……来るか

「俺はレベル８の《ファントム・ドラゴン》と《神獣王　バルバロス》でオーバーレイ。２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。来い、《神竜騎士　フェルグラント》」

ＡＴＫ　２８００

エクシーズ召喚……こいつもエクシーズ使いか？

「俺はカードを１枚伏せてターンを終了する」

男　手札→３枚

「そいつの効果は分からないが俺は俺のデュエルをするだけだぜ！俺のターン、ドロー！」

よし！これなら行ける！

「俺は《ゴゴゴゴーレム》を召喚！」

ＡＴＫ　１８００

「レベル４が２体……出すのか、遊馬」

「俺はレベル４の《ゴゴゴゴーレム》と《ガガガマジシャン》でオーバーレイ！２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚！現れろ！未来へと導く希望の戦士、《Ｎｏ．３９　希望皇ホープ》！」

ＡＴＫ　２５００

「……希望皇……ホープ……」

久しぶりだな……ホープ……。また俺に力を貸してくれ！

「俺はカードを２枚伏せてターンエンド！」

遊馬　手札→３枚

「……俺のターン、ドロー」

今はまだ動けない。一先ずはホープに耐えてもらうしかない！

「……俺はフェルグラントで《希望皇　ホープ》に攻撃」

「へっ！甘いぜ！《希望皇　ホープ》の効果発動！モンスターの攻撃宣言時にこのカードのＯＲＵを１つ使い、その攻撃を無効に出来る！

ムーン・バリアー！」

ＯＲＵ　２→１

「ならばこちらもフェルグラントの効果を発動」

なにっ⁉　このタイミングで発動⁉

「ＯＲＵを１つ使い、場にいるモンスター１体を選択する。選択したモンスターはこのターン効果は無効となり、このカード以外の効果を受け付けなくなる」

「なっ⁉　」

ＯＲＵ　２→１

２８００　２５００＝３００

４０００　３００＝３７００

「うっ⁉　だが俺は罠カード、《エクシーズ・リボーン》を発動！墓地のモンスターエクシーズを特殊召喚できる！戻って来い！希望皇ホープ！」

ＡＴＫ　２５００

「そしてこのカードは特殊召喚したモンスターのＯＲＵとなる！」

希望皇ホープ

ＯＲＵ　０→１

「……俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

男　手札→3枚

くっ⁉　あのモンスター……かなり厄介な効果を持ってるな……。このターンでなんとかしなくちゃな！

「俺のターン！ドロー！」

……よし！このカードなら！

「俺は《アチャチャアーチャー》を召喚！」

ＡＴＫ　１２００

「《アチャチャアーチャー》が召喚に成功した時、相手に５００ポイントのダメージを与える！そしてダメージを与える効果が発動した時、このカードは手札から特殊召喚出来る！来い！《アチャチャチャンバラー》！」

ＡＴＫ　１４００

「この効果で《アチャチャチャンバラー》を召喚した時、相手に４００のダメージを与える！よって合計９００のダメージを受けてもらうぜ！」

「……いいだろう。フェルグラントの効果は使わない」

４０００　９００＝３１００

「よっしゃあ！俺はレベル３の《アチャチャアーチャー》と《アチャ

チャチャンバラー》でオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚！来い！《Ｎｏ．３０　破滅のアシッドゴーレム》！」

ＡＴＫ　３０００

「攻撃力３０００か……」

「行け！アシッドゴーレムでフェルグラントを攻撃！アシッド・スプラッシュ！」

「そうはさせん。リバースカード、《禁じられた聖槍》を発動。モンスター一体の攻撃力を８００ポイントダウンさせる。俺が選択するのは当然《Ｎｏ．３０　破滅のアシッドゴーレム》」

アシッドゴーレム
ＡＴＫ　３０００→２２００

「しまった⁉　アシッドゴーレムの攻撃力が⁉　」

「このカードの対象になったモンスターは他の魔法・罠の効果を受けない。迎え撃て、フェルグラント。」

２８００　２２００＝６００

３７００　６００＝３１００

「ぐっ⁉　くそ……フェルグラントを倒すどころかこっちがダメージを受けちまったぜ……」

「落ち着け遊馬。手札のそのカードならまだ対処できる」

手札のカード……そうか！

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド！」

遊馬　手札↓1枚

「俺のターン。ドロー。……バトルだ。フェルグラントでホープに攻撃」

よし！これならいける！

「俺はホープの効果発動！ORUを1つ使いフェルグラントの攻撃を無効にする！ムーンバリアー！」

ホープ
ORU　1↓0

「まだ分からないのか？俺はフェルグラントの効果を発動。ORUを1つ使い、モンスター1体の効果を無効にする。ホープの効果など無意味だ」

「よし、今だ！遊馬！」

「おう！俺はリバースカード、《もの忘れ》を発動！」

「なんだと？」

「このカードは、相手のモンスター効果が発動した時に発動でき、その効果を無効にしそのモンスターを守備表示にする！」

フェルグラント
ＡＴＫ　２８００→ＤＥＦ　１８００

「……なるほど」

「へへっ！フェルグラントが守備表示になった事により、バトルは中止となる！」

「……俺はこれでターンエンド」

男　手札→４枚

「俺のターンだ！ドロー！俺は希望皇ホープでフェルグラントを攻撃！ホープ剣・スラッシュ！」

ＤＥＦ　１８００　ｖｓ．　ＡＴＫ　２５００

「……」

よっしゃあ！フェルグラントを倒したぜ！

「……」

「ん？どうしたんだよ、アストラル。」

「いや、フェルグラントが破壊されたと言うのに彼は全く動じていないような気がしてな」

「なに？」

確かに言われてみればエースが破壊されたはずなのに全く動じる

様子が無いな……

「まさか彼はまだエースを出していないのかもしれない……」

「なんだって⁉　」

バカな⁉　フェルグラントはかなり強力な効果を持っていたんだ！あれがエースでなければ一体何が……

「くっ……考えても仕方がない。俺はこれでターンエンド！」

遊馬　手札→2枚

「俺のターン。ドロー。……そろそろ終わりにしようか」

「なに⁉　」

「俺は《幻木龍》を召喚」

ＤＥＦ　１４００

「さらにこのカードは、自分の場に地属性のモンスターが存在する時に手札から特殊召喚できる。《幻水龍》を特殊召喚」

ＤＥＦ　２０００

「なっ⁉　このコンボは⁉　」

「これは……ミザエルの遺跡で出会ったジンロンが使っていたコンボ……まさか⁉　」

「俺は《幻木龍》の効果発動。自分の場に水属性のモンスターがいる時、このカードのレベルを8に出来る」

幻木龍
星　4→8

「レベル8のモンスターが2体……来るぞ、遊馬」

「ああ、わかってる！」

「俺はレベル8の《幻木龍》と《幻水龍》でオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚。現れよ、《No.46　神影龍ドラッグルーオン》」

ATK　3000

「な、ナンバーズ⁉　しかもこのカードは⁉　」

「ドラッグルーオンの効果発動。自分の場に他のモンスターがいない時、ORUを1つ使い手札からドラゴンを一体特殊召喚できる。俺は手札のこのカード……《青眼の白龍》を特殊召喚する」

ATK　3000

なっ⁉　ブルーアイズだって⁉　なんでこいつがブルーアイズを⁉

「……遊馬。どうやら幻想郷は我々の世界とはかなり違うようだ」

「どうやらそうみたいだな……。ブルーアイズ……あの伝説の決闘者である武藤遊戯のライバル、海馬瀬戸のみが所持していた伝説のレア

カード。相手にとって不足は無いぜ！」

「これで終わらせる。ドラッグルーオンで希望皇ホープに攻撃」

ＡＴＫ　３０００　ｖｓ．　ＡＴＫ　２５００

「希望皇ホープの効果発動！ＯＲＵの無いこのカードが攻撃された時、このカードは破壊される！」

「……攻撃対象がいなくなったことにより、ドラッグルーオンの攻撃は巻き戻され続けて攻撃が出来る。貴様の場にモンスターはいない。ドラッグルーオンでダイレクトアタック」

「遊馬！リバースカードだ！」

「ああ！俺はリバースカード、《ダメージ・ダイエット》を発動！このターン自分の受けるダメージを全て半分にする！」

３１００　３０００　２＝１６００

「ぐあああぁぁ!!」

「……《青眼の白龍》でダイレクトアタック」

１６００　３０００　２＝１００

「ぐあああああぁぁぁぁ!!　!!」

「……耐え抜いたか。だがお前の場にモンスターはいない。ライフも残り僅か。俺はこれでターンエンド。（俺の伏せたカードは《エクシーズ・ブロック》。相手が例え強力なエクシーズモンスターを召喚

し効果を発動しようが、ドラッグルーオンのＯＲＵを１つ取り除いて無効にし破壊することができる）」

確かに俺のライフは僅かに１００……。俺の手札は２枚……。次のドローでなんとかしなければ俺は負ける……

「遊馬。自分のデッキを信じろ。そのデッキは自らが作り上げたデッキだ。信じれば必ずデッキは応えてくれる」

っ⁉

ーー『君の望んだ通りに作るといい。そのデッキは君自身だからな』

まさかアストラルの言った事はそう言う意味だったのか？

「……分かったぜ、アストラル！かっとビングだ！オレェ！ドロー！」

……っ⁉

「よっしゃあ！きたぜぇ！俺は手札から魔法カード、《エクシーズ・リベンジ》を発動！自分の墓地のモンスターエクシーズを特殊召喚する！もう一度頼むぜ！《Ｎｏ．３９　希望皇ホープ》！」

ＡＴＫ　２５００

「ちっ、またそいつか。だが俺の伏せカードは《エクシーズ・ブロック》。自分の場のエクシーズモンスターのＯＲＵを１つ取り除いきモンスター効果を無効に出来る。それにＯＲＵの無いホープなど怖くもない」

「それはどうかな？」

「なんだと？」

「《エクシーズ・リベンジ》にはもう一つの効果がある！相手の場のモンスターエクシーズのＯＲＵをこの効果で特殊召喚したモンスターのＯＲＵにすることが出来る！」

「なに!?」

Ｎｏ．４６　神影龍ドラッグルーオン
ＯＲＵ　１→０

Ｎｏ．３９　希望皇ホープ
ＯＲＵ　０→１

「くっ、これでは《エクシーズ・ブロック》の効果は使えない。だが希望皇ホープの攻撃力は２５００。その攻撃力では俺のモンスターを破壊する事は出来ない」

「いや！俺にはまだ、２枚の手札がある！魔法カード、《破天荒な風》を発動！このカードは、ホープの攻撃力を次の自分のスタンバイフェイズまで１０００ポイントアップさせる！」

ＡＴＫ　２５００→３５００

「くっ、ドラッグルーオンの攻撃力を越えたか……」

「行け！希望皇ホープでドラッグルーオンを攻撃！そしてこの瞬間！ホープの効果を発動！ＯＲＵを１つ使い、ホープ自身の攻撃を無効にする！」

「自分の攻撃を無効にしただと？まさか⁉　」

「これで最後だ！俺は手札から、《ダブル・アップ・チャンス》を発動！自分のモンスターの攻撃が無効になった時、そのモンスターの攻撃力を２倍にし、もう一度バトルすることが出来る！」

「しまった⁉　」

ＡＴＫ　３５００→７０００

「いっけぇ！希望皇ホープでもう一回ドラッグルーオンに攻撃！ホープ剣・ダブルスラッシュ！」

「これが……九十九遊馬のデュエルか……」

７０００　３０００＝４０００

３１００　４０００＝－９００

ＷＩＮ　九十九遊馬

よっしゃあ！勝ったゼェ！

「遊馬……どうやら君は、私がいない間にデュエルの腕を上げていたようだな」

「へへっ、当たり前だろ」

っと、そう言えばさっきの奴は大丈夫か？

「いったったった……」

「おい、大丈夫か？」

「えっ？俺は一体何をしてたんだっけ？」

「なに？」

どう言う事だ？さっきのデュエルの記憶がない？

「……遊馬、彼のデッキを見てみろ」

「えっ？っ⁉　これは……」

「……どうやら何者かによって仕組まれていたデュエルだったようだ」

アストラルの言う通りにデッキを確認してみると、先程のデュエルで使ったカードが入っていなかった……

「あっ！遊馬！もう、こんな所にいた！」

「鈴仙！」

「もう、ここは迷うから離れないでって言ったでしょ！」

「わ、悪い」

「まぁいいわ。あれ？そっちの彼は？」

「あ、ああ。こいつはどうやら俺と同じでこの竹林に迷ってたみたい

なんだ」

「あら、そうなの？なら今から人里に送ってあげるわ」

「あ、ありがとうございます！」

「……今度は離れないでね？」

「わ、分かってるよ……」

こうして俺たちは人里へと向かう事にした。俺たちが永遠亭に戻ったのは夕暮れ頃になってからだった

それにしても今日あった奴に一体何があったんだ？

霊夢対魔理沙！ライバル対決！

～???～

「流石は伝説のデュエリスト達。そこら辺の奴らを操っただけでは勝てないわね」

「当然だろう。奴らは歴戦を戦い抜いてきたデュエリストだ。普通のデュエリストとはレベルが違う」

「へぇ……彼らの事を知ってるんだね」

「……ああ」

「まぁ、これからゆっくり観察させて貰うとしましょう」

～???～

……彼らも動き出したみたいね

「紫～♪彼らをちゃんと連れてきたわよ～♪」

「あら幽々子。お疲れ様。他のみんなも連れてこれたみたいね」

「ああ、意外にあっさりと承諾してくれた」

「これで良かったのよね？」

「ええ。ありがとう。後は私に任せてちょうだい」

さてと……後は藍の報告を待つだけね。まぁ、藍ならあの傲慢な吸血鬼を説得するなんてわけないと思うけどね。私は暫く彼らの行動を見守っていようかしら

「っとと！よし！着いたぜ！」

「う、うん。ありがとう……」

うっ……僕は乗り物酔いはしない方だけどこんなスピードで飛ばれたら流石にキツイよ……

「霊夢～！帰ってきたぜ～！」

僕たちは博麗神社に帰って来ると霊夢が縁側でお茶を飲んでいた

「あら？遅かったわね。何かあったの？」

「それが聞いてくれよ！実はな……」

魔理沙は香霖堂で起きた出来事を霊夢に説明した

「あの時の遊戯は凄かったぜ……霊夢にも見せたかったぜ！」

「……やはり伝説のデュエリストってわけね」

「？何か言ったか？」

「いえ。何でもないわ」

霊夢は少し考える素振りを見せたが首を横に振りそう言った。僕にも何か言ったように聞こえたんだけど……

「それにしても遊戯のデュエルを見てたら私までデュエルがしたくなってきたぜ！よし！霊夢！私とデュエルだ！」

魔理沙はそう言いながら霊夢にビシッ！と指をさした

「……展開が急過ぎて読めないんだけど？」

「なに言ってんだ！こんなのは思いついた時に実行するもんだろ？」

「面倒だからパスよ、パス」

「なんだ？負けるのが怖いのか？」

霊夢が断った後に魔理沙が煽り始めた。デュエルするなら僕が相手でもいいような……

「そんなんじゃあ博麗の巫女の名が泣くなぁ」

「……いいじゃないの。そのデュエル……受けてやるわよ！」

……ええっと……どうしてこうなったんだっけ？

『いいじゃないか、相棒』

あっ!?　もう一人の僕！

『いい機会だ。このデュエルで幻想郷のデュエルと言うものを見せて貰おうぜ』

そうだね。確かにいい機会かもしれないね

「じゃあ早速準備して始めようぜ！」

「ええ、早く終わらせてあげるわ」

『デュエル！』

ＬＰ　４０００　ｖｓ.　４０００

「先攻はもらうぜ！私のターン！ドロー！私はフィールド魔法、《魔法都市エンディミオン》を発動するぜ！」

「いきなり来たわね……」

「このカードは、互いに魔法カードを発動するたびにこのカードに魔力カウンターを１つ置く！更に破壊される場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを取り除いて破壊を無効に出来るぜ！」

あのカードが魔理沙のキーカードかな？

『だろうな。だがあのフィールド魔法はあれだけで終わりとは思えないな』

「私は《見習い魔術師》を守備表示で召喚！」

見習い魔術師
ＤＥＦ　８００

「《見習い魔術師》の効果発動！このカードの召喚に成功した時、自分の場のカード１枚に魔力カウンターを乗せることができる！私は《魔法都市エンディミオン》にカウンターを乗せる！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　０→１

「私はこれでターンエンド！」

魔理沙　手札→４枚

「伏せカード無しでターンエンド……誘ってるわね。私のターン、ドロー！」

『魔理沙は魔力カウンター主体の魔法使いデッキ。霊夢はどんなカードを使うのか楽しみだ』

「私は魔法カード、《融合》を発動！私は手札の火属性のヒーロー……《Ｅ・ＨＥＲＯ　ザ・ヒート》と《Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア》を融合！融合召喚！来なさい！炎のヒーロー……《Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター》！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター
ＡＴＫ　２６００

「いきなり来たか！融合召喚！だが魔法カードが発動した事により《魔法都市エンディミオン》に魔力カウンターが置かれる！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　1→2

あれはE・HERO!?

『十代くんと同じか……だが十代くんの使ってたモンスターとは違うようだな……』

「私はノヴァマスターで《見習い魔術師》に攻撃！ヴォルカニック・オーバー・ドライブ！」

「効果を知りながら攻撃してくるか……霊夢らしいな！」

「私はやらずに後悔するよりやって後悔するタイプなのよ！」

ＡＴＫ　２６００　ｖｓ．　ＤＥＦ　８００

「ぐっ……《見習い魔術師》が破壊された時、デッキからレベル２以下の魔法使いを裏守備表示で特殊召喚出来る！私は２体目の《見習い魔術師》を特殊召喚するぜ！」

「でも私もノヴァマスターの効果を発動！このカードが相手モンスターを破壊した時、デッキからカードを１枚ドロー出来る」

霊夢
手札　３枚→４枚

「私はカードを３枚伏せてターンエンド！」

霊夢　手札→1枚

「私のターンだ！ドロー！私は《見習い魔術師》を反転召喚し効果を発動！」

見習い魔術師
ＡＴＫ　４００

「魔法都市エンディミオンに魔力カウンターを1つ置く！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　2→3

またフィールド魔法にカウンターを溜めた？

『魔力カウンターを溜めて何かを狙っているのか？』

「私は《マジカル・コンダクター》を召喚！」

マジカル・コンダクター
ＡＴＫ　１７００

「《マジカル・コンダクター》は互いのプレイヤーが魔法カードを発動するたびに魔力カウンターを2つ置く！そして手札から魔法カード、《魔力掌握》を発動！《見習い魔術師》と同じく自分の場のカード1枚に魔力カウンターを置く事が出来る！この効果で《魔法都市エンディミオン》に魔力カウンター更に置く！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　3→4

「更にこのカードは発動後、同名カードをデッキから持ってくることができる！」

でも確かあのカードの発動は……

『ああ、《魔力掌握》は1ターンに1枚しか発動出来ない。使うとしたら次のターンだな』

「そして魔法カードが発動した事により、《魔法都市エンディミオン》と《マジカル・コンダクター》にカウンターを乗せる！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　4→5

マジカル・コンダクター
魔力カウンター　0→2

「更に魔法カード、《精神統一》を発動！デッキから同名カードを手札に加えるぜ！そして魔法カードの発動で、《魔法都市エンディミオン》と《マジカル・コンダクター》にカウンターを置く！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　5→6

マジカル・コンダクター
魔力カウンター　2→4

「魔力カウンターが6個……来るわね！」

「行くぜ霊夢！このカードは自分の場の《魔法都市エンディミオン》の

魔力カウンターを６個取り除く事により手札から特殊召喚出来る！」

っ⁉　フィールド魔法とセットで真価を発揮するモンスター⁉

『これが狙いで魔力カウンターを溜めてたのか』

「さぁ頼むぜ！《神聖魔導王　エンディミオン》！」

神聖魔導王　エンディミオン
ＡＴＫ　２７００

「早い登場ね……」

「一気に行くぜ！エンディミオンの効果発動！この方法で特殊召喚に成功した時、墓地から魔法カードを手札に戻す事が出来る！私は《精神統一》を手札に戻す！」

「そして《マジカル・コンダクター》のさらなる効果を発動！このカードの魔力カウンターを全て取り除き、手札か墓地から取り除いた魔力カウンターと同じレベルの魔法使いを特殊召喚出来るぜ！現在のカウンターは４個……よって私は手札のレベル４の《召喚僧サモンプリースト》を特殊召喚するぜ！」

召喚僧サモンプリースト
ＤＥＦ　１６００

「そしてサモンプリーストの効果発動！手札の魔法カード、《精神統一》を墓地に送ることで、デッキからレベル４のモンスターを特殊召喚出来る！私が特殊召喚するのは《アステル・ドローン》だぜ！」

アステル・ドローン

ＡＴＫ　１６００

「そしてレベル４の《マジカル・コンダクター》と《召喚僧サモンプリースト》と《アステル・ドローン》の３体でオーバーレイ！」

「なっ⁉　オーバーレイ⁉　」

「遊戯には言ってなかったわね。この世界では貴方の世界には無かった召喚方法が存在するの。同じレベルのモンスターを指定された数を重ねる事でエクストラデッキから特殊召喚出来るモンスター。それがエクシーズ召喚よ」

『エクシーズ召喚……これがこの幻想郷のデュエルか』

「えっと……もう続けていいか？」

「あっ、うん。止めちゃってごめん」

「別に構わないぜ。じゃあ……３体の魔法使い族モンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！頼むぜ、《アルケミック・マジシャン》！」

アルケミック・マジシャン
ＡＴＫ　１５００

攻撃力１５００？《アステル・ドローン》と《マジカル・コンダクター》の攻撃力の合計よりも低くなったけど……

『エクシーズ召喚は俺たちにとって未知の力だ。３体のモンスターを素材にしてまで召喚したのだからそれだけ強力な効果なんだろう』

「《アステル・ドローン》をエクシーズ素材としたエクシーズモンスターのエクシーズ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロー出来る！」

魔理沙
手札　2→3

「《アルケミック・マジシャン》の効果発動！自分の墓地の魔法カード1枚につきこのカードの攻撃力を２００ポイントアップする！現在の墓地にある魔法カードは《精神統一》と《魔力掌握》の2枚！よって攻撃力は４００アップする！」

アルケミック・マジシャン
ＡＴＫ　１５００→１９００

「一気に回すわね。今日は調子いいのかしら？」

「まだまだ行くぜ！《神聖魔導王　エンディミオン》は1ターンに1度、手札の魔法カードを墓地に捨てることで、フィールドのカードを1枚破壊できる！手札の《精神統一》を捨てて、《Ｅ・Ｈ　ＨＥＲＯノヴァマスター》を破壊するぜ！ホーリー・デストラクション！」

「くっ……。これじゃあこの伏せカードが使えない……」

「墓地に魔法カードが増えた事により、《アルケミック・マジシャン》の攻撃力は更に上昇する！」

アルケミック・マジシャン
ＡＴＫ　１９００→２１００

「バトルだぜ！《アルケミック・マジシャン》で霊夢にダイレクトア

タック！」

「霊夢の場にモンスターはいない……2体の攻撃が通ったら勝負が決まる」

『だが霊夢の目は死んでないぜ』

「私はリバースカード、《ヒーロー見参！》を発動！相手の攻撃宣言時、私の手札から相手はランダムにカードを選び、それがモンスターなら私の場に特殊召喚出来る。私の手札は1枚……来なさい！《幻影の魔術士》！」

幻影の魔術士
ＤＥＦ　７００

「くっ……なら《幻影の魔術士》攻撃するぜ！」

ＡＴＫ　２１００　ｖｓ．　ＤＥＦ　７００

「うっ……《幻影の魔術士》が破壊された瞬間効果発動！このカードが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力１０００以下のＨＥＲＯを特殊召喚出来るわ！頼んだわよ！《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドーミスト》！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドーミスト
ＤＥＦ　１５００

「《Ｅ・ＨＥＲＯ　シャドーミスト》の効果発動！このカードの特殊召喚に成功した時、デッキからチェンジと名のついた速攻魔法を手札に加える事が出来る！私が手札に加えるのは……《マスク・チェンジ》よ！」

「げっ⁉　《マスク・チェンジ》かよ！」

「《マスク・チェンジ》？」

『聞いたことのないカードだが……恐らくＨＥＲＯに関係しているカードだろう』

「だが霊夢のフィールドにモンスターは残させない！《神聖魔導王エンディミオン》でシャドーミストに攻撃！神聖なる波動……シャイニング・レイ！」

ＡＴＫ　２７００　ｖｓ．　ＤＥＦ　１５００

「っ⁉　まだよ！トラップカード、《ヒーローシグナル》を発動！自分のモンスターが戦闘で破壊された時、デッキから新たなレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯを特殊召喚出来るわ！私が呼ぶのは《Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン》！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
ＡＴＫ　１８００

「あちゃぁ……よりによってまずいモンスターを残しちまったな……」

「《Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン》が召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからＨＥＲＯ１体を手札に加える事が出来る。私はデッキから《Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン》を手札に加えるわ」

「さすがに《見習い魔術師》を場に残すのはまずいな……私は手札から装備魔法、《ワンダー・ワンド》を《見習い魔術師》に装備！装備モンスターの攻撃力を５００ポイントアップする！」

見習い魔術師
ＡＴＫ　４００→９００

「そして《ワンダー・ワンド》を装備したモンスターを墓地に送る事で、デッキからカードを2枚ドロー出来るぜ！」

魔理沙
手札　1→3

「エンディミオンの召喚後は忘れがちだが、魔法カードを発動した事によって《魔法都市エンディミオン》に魔力カウンターが置かれるぜ！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　0→1

「……完全に忘れてたわ」

「やっぱりな。私はカードを1枚伏せてターンエンド！そして私のエンドフェイズ時に《アルケミック・マジシャン》の更なる効果を発動！ＯＲＵを1つ使い手札を1枚捨てる事で、デッキから魔法カードを1枚選択し、自分の魔法&罠カードゾーンにセット出来る！」

アルケミック・マジシャン
ＯＲＵ　3→2

ＯＲＵ（オーバーレイユニット）？

『恐らくエクシーズ召喚に使用したモンスターの事だろう。いわゆるエクシーズ素材というやつか……。ＯＲＵを使う事でエクシーズモ

ンスターの真価を発揮させる事が出来るはずだ』

さすがだねもう一人の僕。見慣れないモンスターの分析もすぐに終わっちゃうなんて……

「私は手札の《魔力掌握》を捨て、デッキから《死者蘇生》を伏せる」

「死者蘇生……墓地からモンスターを特殊召喚出来る強力な魔法カードだね」

『霊夢の場にはエアーマンが一体と伏せカードと手札、共に1枚。このターンで巻き返さなければ次のターンには劣勢になる事は確実だ』

魔理沙　手札→1枚

「魔法カードが墓地に増えたから《アルケミック・マジシャン》の攻撃力も上がるぜ！」

アルケミック・マジシャン
ＡＴＫ　２１００→２３００

「さぁ！霊夢のターンだぜ！」

「わかってるわよ。私のターン……ドロー！……魔理沙、どうやらこのターンでケリが付きそうよ？」

「なにっ⁉」

このターンで決めるだって⁉

「私は魔法カード、《融合回収》を発動！墓地にある《融合》と融合素

材となったモンスターを1体手札に戻す！私が戻すのは《融合》とザ・ヒートよ！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　1→2

「そして《融合》発動！場のエアーマンと手札のオーシャンを融合！融合召喚！来なさい！氷を司る水の戦士、《E・HERO　アブソリュートZero》！」

E・HERO　アブソリュートZero
ATK　2500

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　2→3

「やっべ!?　そのモンスターは！」

「そして《E・HERO　ザ・ヒート》を通常召喚！」

E・HERO　ザ・ヒート
ATK　1600

「ザ・ヒートの攻撃力は自分の場のE・HERO1体に付き攻撃力を200アップするわ」

E・HERO　ザ・ヒート
ATK　1600→2000

「あっ、終わったっぽいな……」

「最後に手札から速攻魔法、《マスク・チェンジ》を発動！自分の場のＨＥＲＯを墓地に送る事で、エクストラデッキから同じ属性のＭ・ＨＥＲＯを特殊召喚出来る！私はアブソリュートＺｅｒｏを対象に発動し、エクストラデッキから同じ水属性のＭ・ＨＥＲＯを召喚する！変身召喚！全てを無に帰す浄化の雨を降らせよ！《Ｍ・ＨＥＲＯ　アシッド》！」

Ｍ・ＨＥＲＯ　アシッド
ＡＴＫ　２６００

魔法都市エンディミオン
３→４

マスクドヒーロー⁉

『Ｅ・ＨＥＲＯとは全く違ったヒーローのようだな』

「私は《Ｍ・ＨＥＲＯ　アシッド》の効果を発動！このカードの特殊召喚時、相手の場の魔法・罠を全て破壊する！Ａｃｉｄ　ｒａｉｎ！」

「《魔法都市エンディミオン》が破壊される時、魔力カウンターを１つ取り除いてその破壊を無効にする！」

魔法都市エンディミオン
魔力カウンター　４→３

「くっ……ミラーフォースが……」

「まだよ！墓地に送られたアブソリュートＺｅｒｏの効果も発動してるわ！アブソリュートＺｅｒｏが墓地に送られた時、相手のモンスターを全て破壊する！」

「うっ!?　エンディミオンと《アルケミック・マジシャン》まで……。相変わらずこのコンボはインチキだぜ……」

擬似《サンダー・ボルト》と《ハーピィの羽根箒》なんてエグいね……

『これで魔理沙の場はガラ空き……。どうやら決まったみたいだな……』

「私の場にE・HEROが消えた事により、ザ・ヒートの攻撃力は２００ダウンするわ」

E・HERO　ザ・ヒート
ATK　２０００→１８００

「バトルよ！ザ・ヒートでダイレクトアタック！」

４０００　１８００＝２２００

「うぐっ……まぁた負けちまったなぁ……」

「これでラストよ！《M・HERO　アシッド》でダイレクトアタック！Acid　bullet！」

２２００　２６００＝－４００

「うあああああぁぁぁぁ!!　!!」

Win　博麗霊夢

スゴイなぁ……。あんなに追い詰められてもダメージ無しで勝っちゃうなんて……

『これが博麗の巫女の実力か……』

「くぅ～！悔しいぜぇ！結局ダメージを与えられなかったぜ……」

「エンディミオンを警戒して《幻影の魔術士》を通常召喚しなかったけど正解だったみたいね」

「やっぱ幻想郷最強は伊達じゃねぇな……」

「えっ⁉　霊夢って幻想郷最強なの⁉　」

「その呼び名は止めてって言ってるでしょ」

「悪い悪い。でもこれだけ強いと遊戯と霊夢どっちが強いか知りたくなってきたぜ！」

うーん……霊夢とまだデュエルしたことないから分からないなぁ……

「……まぁ、機会があればデュエルしてみるのもいいわね。今日はもう疲れたでしょ？あとはゆっくり休みなさい」

「あっ、うん。じゃあそうさせて貰おうかな」

「じゃあ私もそろそろ帰るか。またな！遊戯！」

魔理沙はそう言うと、箒にまたがり自分の家へと飛んで行った。僕たちも今日は休む事にした

「二人っきりになるのも久しぶりだね。もう一人の僕」

『ああ、そうだな相棒』

「紫さんはどうして僕をこの世界に連れてきたんだろう」

『分からない。だが1つだけ言える事は、紫が相棒を幻想郷へと連れてきたおかげで俺たちは再び出会う事が出来た』

「……そうだね。今はその事だけでも喜ぶことかな」

『ふっ……これからまたよろしく頼むぜ？相棒』

「うん。よろしくね？もう一人の僕」

こうして僕たち2人の幻想郷での生活が始まった。そして幻想郷

での僕たちの物語が始まろうとしていた……

主従対決！妖夢と幽々子！

「ただいま帰りました」

俺たちは人里から白玉楼へと戻ってきた。それにしてもここの階段はマジで長い……

「あら～、お帰りなさい♪妖夢」

すると白玉楼の前には幽々子さんが立っていた

「幽々子様⁉　帰ってきていたんですか！」

「ええ。ついさっきね」

幽々子さんは軽く頷いてそう言った

「それでどうだった？」

「えっ？何がですか？」

「何って決まってるでしょ？十代君とのデート♪」

「なっ⁉　なななな何を言ってるんですか⁉　そんなんじゃないですよ⁉　」

妖夢は突然顔を赤くして首を思いっきり横に振った

『十代……』

ユベル……頼むからそんな目でこっちを見るな……

『……まぁいいさ。十代は僕のものなのは変わりないからね』

……なんか一瞬昔のユベルに戻った気がする

「あっ、そうだ妖夢～♪ちょっと頼みがあるのだけれど～」

「えっ？なんですか？」

「突然だけど私とデュエルしましょ♪」

「デュエルですか？いいですけど何故そんな急に……」

「理由は2つよ。一つは貴女の成長を確かめるため。もう一つは……これから起こることに立ち向かえる覚悟と力があるかを確かめるため」

これから起こること？俺が呼ばれた理由はそれが関係しているのか？

「分かりました。私の今の力を幽々子様に見せます！」

「(と言っても私だけじゃなくて十代君にも妖夢の力を知っていてほしいからね)」

「お！妖夢と幽々子さんがデュエルすんのか！」

『楽しそうだね。十代』

当たり前だろ！どんなデッキでどんなデュエルをするのかと考え

るとワクワクが止まらねぇぜ！

『君はいつでもブレないね。でもそれでこそ十代らしいか』

「じゃあ早速行きますよ！幽々子様！」

「いつでもいいわよ～♪」

『デュエル！』

ＬＰ　４０００　ｖｓ．　４０００

「先攻は貰います！ドロー！」

さぁ、妖夢は一体何デッキだ？

「私は永続魔法、《六武衆の結束》を発動します！」

『どうやら妖夢君のデッキは【六武衆】みたいだニャ～』

あれ？大徳寺先生いつからいたんだ？

『ついさっきニャ。やっとファラオが解放してくれて助かったニャ～』

それにしても六武衆か……。確か仲間と力を合わせることで効果を発揮することの出来るデッキだったか？へへ、妖夢のお手並み拝見だな

「私は更に手札の《六武衆ーザンジ》を召喚！」

六武衆ーザンジ
ＡＴＫ　１８００

「この瞬間！《六武衆の結束》の効果が発動されます！六武衆と名のつくモンスターが召喚・特殊召喚された時に、このカードに武士道カウンターを１つ置きます！」

六武衆の結束
武士道カウンター　０→１

「そして私はカードを１枚伏せてターンエンド！」

妖夢　手札→３

『《六武衆の結束》に溜めることのできるカウンターは２つまで。次のターンに回すつもりかな？』

「私のターン、ドロー♪初めから行くわよ？」

「っ⁉　まさかもう……」

「私は手札の《冥界の宝札》を発動するわ。自分が２体のモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した時、デッキから２枚のカードをドロー出来る」

『《冥界の宝札》……。どうやら幽々子のデッキは最上級モンスターをあのカードでコントロールする上級者向けのデッキみたいだね』

「そして手札のレベル８以上のモンスターを墓地に送り、手札のこのカードは特殊召喚出来るわ。私は手札の《神獣王　バルバロス》を墓地に送って、《ハードアームドラゴン》を特殊召喚♪」

ハードアームドラゴン
ＡＴＫ　１５００

「更に魔法カード、《デビルズ・サンクチュアリ》を発動するわ。自分の場にメタルデビル・トークンを特殊する。このトークンの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは変わりに相手が受ける……だけど私のデッキの場合あんまり関係ないわね♪」

メタルデビル・トークン
ＡＴＫ　０

「これは1ターン目から来ますか……」

「私は《ハードアームドラゴン》とトークン一体をリリース♪来てちょうだい、《古代の機械巨竜》！」

古代の機械巨竜
ＡＴＫ　３０００

「《冥界の宝札》の効果でデッキからカードを2枚ドローするわね♪」

幽々子
手札　2→4

アンティークギア……。なんかクロノス先生を思い出すな……

『だが彼女のデッキはアンティークギアで固めているわけではない。なのにこれだけアドバンテージを取りながら回すことができるのは感心するね』

お前も似たようなものだろう……

『十代君も大概だと思うのニャ……』

「《ハードアームドラゴン》をリリースしアドバンス召喚したモンスターは、カード効果では破壊されないわよ。更に《古代の機械巨竜》はバトルする際に相手の魔法・罠の発動をダメージステップ終了時まで封じる効果があるわ」

って事は今の《古代の機械巨竜》には《次元幽閉》のような攻撃対応型のカードも、《サンダーブレイク》のような破壊カードも効かないってわけか

『中々強力なコンボだね。妖夢はこの状況をどうやって切り抜けるか……』

「少し予定外ですが想定の範囲内です！リバースカードオープン！《六武式風雷斬》！自分の場の武士道カウンターを1つ取り除いて2つの効果から1つを選択して発動します。1つは相手のモンスターを破壊する効果。もう一つは相手のカードを手札に戻す効果。私は2つ目の効果を選択します！対象は当然《古代の機械巨竜》！」

六武衆の結束
武士道カウンター　1→0

「あらら～、手札に戻されちゃったわね～」

『なるほど、破壊も出来ず攻撃時に罠を発動できないのであれば手札に戻してしまえばいいってわけか。相手のデッキを知り尽くしているからこその戦術だね』

「スゲェぜ！妖夢！あんなにあっさりと状況をひっくり返すなんてな！」

「《ハードアームドラゴン》を素材にしなければ破壊効果を選べたのですが……」

「でも私だってタダでは終わらないわよ♪魔法カード、《トレード・イン》を発動！自分の手札からレベル８のモンスター、《古代の機械巨竜》を墓地に送り、２枚のカードをドローするわ」

幽々子さんも直ぐに手札のカードを入れ替えて態勢を整えたな。これは見ごたえのあるデュエルになりそうだぜ！

「私はカードを2枚伏せてターンエンドよ。さぁ妖夢。貴女の成長した力を見せてちょうだい」

幽々子　手札→3

「言われなくてもそのつもりです！ドロー！私は《六武衆ーニサシ》を召喚！」

六武衆ーニサシ
ＡＴＫ　１４００

「六武衆の召喚により、《六武衆の結束》にカウンターが１つ置かれます」

六武衆の結束
武士道カウンター　０→１

「続いて手札から《六武衆の師範》を特殊召喚！」

六武衆の師範
ＡＴＫ　２１００

「このカードは自分の場に他の六武衆がいる時に手札から特殊召喚出来ます。そして《六武衆の結束》には更なるカウンターが置かれます」

六武衆の結束
武士道カウンター　１→２

「《六武衆の結束》の効果発動！このカードを墓地に送り、このカードに乗っていたカウンターの数だけデッキからカードをドローできます！乗っていた武士道カウンターの数は２つ……よって２枚のカードをドローします！」

妖夢
手札　２→４

『フィールドの制圧とドローを同時に行う……更に幽々子の行動を読んだプレイング……彼女は中々腕のいいデュエリストだね。君でも苦戦を強いられるんじゃないか？』

そうだなぁ……確かに妖夢は強い。でも何か少し固いような気がするんだよな……。何かが足りないっていうのかな……

『かつて君が忘れていたものかい？』

……かもしれないな。妖夢もそれに気付くことが出来ればもっと強くなれると思うぜ？

『君も一丁前の事を言うようになったね。』

……悪かったな

「行きます！《六武衆ーザンジ》で幽々子様にダイレクトアタック！」

「じゃあ私は永続トラップ、《メタル・リフレクト・スライム》を発動するわ。このカードは発動後、モンスターカードとして守備表示で特殊召喚される特殊なカードよ♪」

メタル・リフレクト・スライム
ＤＥＦ　３０００

「構いません！《六武衆ーザンジ》でそのまま攻撃します！」

「攻撃力の低いモンスターで攻撃？」

『十代くんは勉強不足みたいだニャ。ザンジにはモンスター効果があるんだニャ』

ＤＥＦ　３０００　ｖｓ．　ＡＴＫ　１８００

３０００　１８００＝１２００

４０００　１２００＝２８００

「うっ……この瞬間ザンジの効果が発動！自分の場に他の六武衆がいる時、このカードとの戦闘で破壊できなかったモンスターを破壊します！《メタル・リフレクト・スライム》は破壊されます！」

「ふふ……中々やるわね、妖夢」

「私の場にはまだモンスターはいます！続いて《六武衆の師範》で幽々子様にダイレクトアタックです！」

「ライフで受けるわ♪」

４０００　２１００＝１９００

「《六武衆ーニサシ》は、自分の場に他の六武衆がいる時、２回の攻撃を可能となります！これで終わらせます！」

「そう簡単にやらせないわよ？リバースカード発動！《フリッグのリンゴ》！自分の場にモンスターがいない時にダイレクトアタックで自分がダメージを受けた場合に発動できる。その数値を回復し、その数値と同じステータスを持つ《邪精トークン》を特殊召喚するわよ♪」

１９００　２１００＝４０００

邪精トークン
ＡＴＫ　２１００

「スッゲェ！あんなカードまであるんか！」

『受けたダメージを回復し、場にモンスターを残す。状況によってはかなり強力なカードだね』

「くっ、防がれたうえにライフも元に戻されましたか……」

「まだまだ甘いわね♪私はそう簡単にはやられないわよ？」

「《邪精トークン》の攻撃力はニサシよりも上。攻撃しても無意味です

ので私はカードを2枚伏せてターンエンドします……」

妖夢　手札→2枚

「私のターン、ドロー♪」

幽々子さんの場にはトークンが一体と《冥界の宝札》が1枚か。次はどんな手で攻めてくんのかな！

「私は手札の魔法カード《手札抹殺》を発動するわ。互いに手札を全て捨て、その枚数だけドローする。私の手札は2枚よ」

「私も同じく2枚です」

「なら2人共2枚捨てて2枚ドローね♪」

幽々子
捨てたカード
レベル・スティーラー
アドバンス・ドロー

妖夢
捨てたカード
六武衆の御霊代
紫炎の足軽

「来たわ。相手の場に魔法・罠が2枚以上ある時、このカードは手札から特殊召喚できる。《氷帝家臣エッシャー》を特殊召喚♪」

氷帝家臣エッシャー
ＤＥＦ　１０００

これで生贄が二体揃った。来るか！

「私はこの2体のモンスターをリリースし、《創世神》をアドバンス召喚♪」

創世神
ＡＴＫ　２３００

「《冥界の宝札》の効果により私は2枚のカードをドロー。」

幽々子
手札　０→２

「更に《創世神》の効果発動。自分の墓地のモンスターを選択し、手札を1枚捨てる事で選択したモンスターを特殊召喚出来るわ。私が選択するのは《古代の機械巨竜》よ。何かチェーンはあるかしら？」

「くっ、何もありません……」

「何もないなら手札を1枚捨てて、《古代の機械巨竜》を復活させるわね」

捨てたカード
幻影騎士団シャドーベイル

古代の機械巨竜
ＡＴＫ　３０００

幽々子さんスッゲェな。こんなにも簡単に上級モンスターを操るなんてな

『それだけ彼女は凄腕のデュエリストって事なのだろう』

「バトルよ。《古代の機械巨竜》でニサシを攻撃！」

３０００　１４００＝１６００

２８００　１６００＝１２００

「うっ……まだまだです！」

「続けて《創世神》でザンジに攻撃よ♪」

２３００　１８００＝５００

１２００　５００＝７００

「うあっ！くっ……この程度なら……」

「これで私はターン終了。さぁ妖夢。貴女の実力を見せてみなさい」

「っ⁉　勿論です！私は最後まで諦めません！」

スッゲェな幽々子さん。かなり不利な状況かと思ってたのにたった1ターンでその状況をひっくり返しちまった

『しかも幽々子はまだライフが変化しておらず、フィールドも制圧してしまった。これは妖夢が逆転するのは少々厳しいかもしれないな』

でも妖夢は諦めてないぜ？デュエルは1つのドローでガラリと変わっちまうもんだ。ここから妖夢がどう動くのかが楽しみだぜ！

『十代くんはいつも逆転ばかりしてるから説得力があるんだにゃ』

「私は幽々子様のエンドフェイズ時に永続トラップ、《神速の具足》を発動します！」

「なるほど。次のドローに賭けてきたわね」

「このカードがある限り、ドローフェイズにドローしたカードが六武衆ならば、そのモンスターを私の場に特殊召喚出来ます！」

「（見せてもらうわよ。貴女の成長……貴女の覚悟を！）」

「（このデュエルは次のドローに掛かっている。幽々子様の場には《創世神》と《古代の機械巨竜》。対する私の場は《六武衆の師範》のみ。お願い……この状況を覆せるカードを……）」

妖夢……お前の力を幽々子さんに見せてやれ！

「私のターン……ドロー！」

『さぁ……彼女は何を引き当てたか……』

「……よし！」

「（あの表情……どうやら来たみたいね）」

「私が引いたのは……《六武衆の露払い》！よって永続トラップ、《神速の具足》の効果により特殊召喚します！」

六武衆の露払い

ＡＴＫ　１６００

「そして《六武衆ーヤリザ》を通常召喚！」

六武衆ーヤリザ
ＡＴＫ　１０００

「《六武衆の露払い》の効果発動！１ターンに１度、自分の場の六武衆をリリースする事で、相手のモンスターを破壊出来ます！私は《六武衆の師範》をリリースし……《古代の機械巨竜》を破壊します！」

「この状況で《古代の機械巨竜》を優先して破壊した？って事はあの伏せカード……一気に攻めて来るつもりね」

「伏せカードオープン！《諸刃の活人剣術》！自分の墓地に存在する六武衆を二体、攻撃表示で特殊召喚出来ます。ただしこの効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊され、破壊されたモンスターの攻撃力分のダメージを受けてしまいますが……」

文字通り諸刃の剣ってわけか……

『妖夢はこのターンで勝負を仕掛けるみたいだね』

「幽々子様……私は私の全力で戦います。私の成長と覚悟……どうか見てください！」

「妖夢……分かったわ。貴女の全力……私も本気で受け止めて上げる！」

「行きます！《諸刃の活人剣術》の効果で、墓地のニサシとザンジを特殊召喚します！」

六武衆ーザンジ
ＡＴＫ　１８００

六武衆ーニサシ
ＡＴＫ　１４００

「バトルです！《六武衆ーヤリザ》は、他の六武衆がいる時、相手にダイレクトアタックが出来ます！ヤリザで幽々子様にダイレクトアタック！」

４０００　１０００＝３０００

「続けてザンジで《創世神》に攻撃します！」

２３００　１８００＝５００

７００　５００＝２００

「うっ……ダメージは受けましたが、ザンジは他の六武衆を身代わりにする事で自身の破壊を免れます。私はザンジの代わりにヤリザを破壊します」

「そして戦闘で破壊されなかった私の《創世神》はザンジの効果で破壊されるわね」

これで幽々子さんの場はガラ空き……ニサシは2回攻撃が出来るから全ての攻撃が通れば妖夢の勝ち。だが……

『幽々子のあの余裕。まだ何か隠してるね』

「ニサシで幽々子様にダイレクトアタック！」

３０００　１４００　２＝２００

「これで最後です！露払いでダイレクトアタック！」

さぁ、幽々子さんはどう出る！

「……ふふふ」

「？何を笑ってるんですか？」

「何でもないわ。ただ……妖夢はまだまだ甘いって思ってね♪」

「え？どうゆう事ですか？」

「デュエルはフィールドばかりじゃないって事よ♪私は墓地からトラップカード、《幻影騎士団シャドーベイル》を発動！」

「なっ⁉　墓地からトラップ⁉　」

「あのカード……そうか！あの時《創世神》の効果で捨てたカードか！」

『なるほど。墓地から発動するトラップとは驚いた。これなら《創世神》の効果を実質ノーコストで発動したと言うわけか』

「このカード相手がダイレクトアタックを宣言した時、墓地から通常モンスターとして特殊召喚出来るカードよ」

幻影騎士団シャドーベイル

ＤＥＦ　３００

「くっ……防がれてしまいましたか……ならば露払いでシャドーベイルに攻撃です！」

ＤＥＦ　３００　ｖｓ．　ＡＴＫ　１６００

「自身の効果で特殊召喚された《幻影騎士団シャドーベイル》が場を離れた時、ゲームから除外されるわ」

これでまた幽々子さんの場にモンスターは居なくなり、《冥界の宝札》だけになったな

『でも妖夢くんの発動したトラップ、《諸刃の活人剣術》によって召喚されたザンジとニサシはエンドフェイズに破壊されその攻撃力の合計……３２００のダメージを受けてしまうんだニャ』

『妖夢はこのターンで攻め切るつもりだった様だが……残念ながら無理だったみたいだね』

いや、妖夢は諦めてねぇぜ？俺はもう少しだけこのデュエルは続くと思う。それにあいつにはまだ最後の手札があるんだ。最後の最後まで何が起こるのか分からないのがデュエルってもんだろ？

『……ふっ、そうだったな』

「私は手札から《一時休戦》を発動！互いにカードを１枚ドローします」

妖夢
手札　０枚→１枚

幽々子
手札　1枚→2枚

「そして次の自分のターンまで、互いに受ける全てのダメージは0になります」

『まるで一方的な休戦……と言いたいが使い方としては理想的なんだろうね』

ああ、これで《諸刃の活人剣術》のデメリットを上手く回避出来るってわけだ

「私はカードを1枚伏せ、ターン終了です。そしてザンジとニサシはエンドフェイズに破壊され私はダメージを受けますが、《一時休戦》の効果でそのダメージは無効となります」

妖夢　手札→0枚

このターンで幽々子さんと妖夢のライフは共に２００。だがこのターンは幽々子さんからダメージを与える事は出来ない……。状況は明らかに妖夢の方が優勢になったな

『しかも妖夢の場には《六武衆の露払い》がいる。あのカードを破壊出来なければ、壁モンスターを出しても効果で破壊されてしまう可能性が出てしまう』

「……妖夢、貴女は本当に昔に比べて強くなったわね」

「幽々子様？どうしたんですか？突然……」

「貴女が成長したのが凄く嬉しいのよ。貴女の主として……」

「幽々子様……」

「でもね？妖夢。私はまだ貴女には負けないわよ？」

「……私だって負けるつもりはありません！確かに私は未熟です……。でも私は十代さんのデュエルを見て思ったんです！私も十代さんみたいに強くなりたい！大切なものを守れる位に……」

妖夢……お前……

「だから……だからこそ！今日こそは幽々子様に勝って、今の自分を越えてみせます！」

「……そう。それが今の貴女の覚悟なのね……。いいわ。私も妖夢の想いに応えるために全力で相手をするわ。行くわよ？妖夢！」

「はい！幽々子様！」

「私のターン……ドロー！……私は《サイバー・ヴァリー》を召喚してターンエンドよ」

サイバー・ヴァリー
ＡＴＫ　０

幽々子　手札→２枚

「私のターン！（サイバー・ヴァリーは攻撃対象になった時、攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する効果だったはず……だったら！）私はリバースカード、《六武衆推参！》を発動！自分の墓地にいる六武

衆をこのターンのみ復活させます。私は墓地のヤリザを召喚！」

六武衆ーヤリザ
ＡＴＫ　１０００

「《サイバー・ヴァリー》は攻撃対象とならなければ効果を発動出来ません。だったら無視してダイレクトアタックすればいいだけです！《六武衆ーヤリザ》でダイレクトアタックです！」

「残念だけどそれも全て計算尽くよ？私は手札から《バトルフェーダー》の効果発動！相手のダイレクトアタック時、このカードを特殊召喚してバトルフェイズを終了するわ」

バトルフェーダー
ＤＥＦ　０

「くっ、また防がれましたか……。なら私は魔法カード、《おろかな埋葬》を発動します！デッキのモンスター……《ネクロ・ガードナー》を墓地に送ります。更にレベル３の《六武衆の露払い》と《六武衆ーヤリザ》でオーバーレイ！」

同じレベルのモンスターで召喚する召喚法……まさかこれが⁉

『どうやらそうみたいだね』

スッゲェ！これがエクシーズ召喚って奴か！

『エクシーズ……この世界での召喚法か何かかニャ？』

「２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚！現れよ、《発条機雷　ゼンマイン》！」

発条機雷　ゼンマイン
ＤＥＦ　２１００

「ゼンマインは破壊される時、ＯＲＵを一つ使う事でその破壊を無効にし、そのエンドフェイズ時に相手のカードを1枚破壊出来ます。私はこれでターンエンドです」

妖夢　手札→0枚

厄介なモンスターだな。ステータスこそ余り高くは無いがその分破壊耐性を持ち、尚且つ除去効果を兼ね備えてるからな

「私のターン、ドロー！……このターンで終わらせるわよ？妖夢」

「なっ⁉　」

『妖夢の墓地にはさっき送った《ネクロ・ガードナー》。更に場には鉄壁の守りを持ったゼンマイン。この状況で本当に勝てると言うのか？』

だが幽々子さんがハッタリを言うとは思えない。恐らく幽々子さんは今引いたカードで確証を得たんだろうな

「私は《サイバー・ヴァリー》と《バトルフェーダー》をリリースし、《堕天使アスモディウス》をアドバンス召喚！」

堕天使アスモディウス
ＡＴＫ　３０００

アスモディウス？あいつじゃあゼンマインを破壊しきれな……ま

さか!?

「更に自分がアドバンスに成功した時、このカードはそのモンスターと同じ種族、属性、レベルのモンスターとして特殊召喚出来る。《イリュージョン・スナッチ》を召喚！」

イリュージョン・スナッチ
ＡＴＫ　２４００
種族　悪魔→天使
レベル　７→８

「レベル８のモンスターが２体……エクシーズですか……」

「そして《冥界の宝札》の効果で２枚ドロー」

幽々子
手札　０枚→２枚

「エクシーズ召喚を使えるのは妖夢だけじゃないのよ？私はレベル８の《堕天使アスモディウス》と《イリュージョン・スナッチ》でオーバーレイ！２体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚！現れよ、冥界に眠りし魂たちを守護する騎士、《Ｎｏ．２３　冥界の霊騎士　ランスロット》！」

Ｎｏ．２３　冥界の霊騎士ランスロット
ＡＴＫ　２０００

「な、ナンバーズ!?　確か普通のエクシーズモンスターよりも強力な力を持つモンスターだったはず……」

「貴女にはまだ見せたことなかったわね。これが私の真のエースよ。

見せてあげるわ、私のナンバーズの力を。ランスロットはＯＲＵがある時、相手にダイレクトアタックが出来る！」

「なっ⁉　攻撃力２０００のダイレクトアタック⁉　」

だが妖夢の墓地には《ネクロ・ガードナー》のカードが……

「冥界の霊騎士ランスロットで、妖夢にダイレクトアタック！」

「くっ！私は墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果を使います！このカードを除外し、その攻撃を無効にします！」

「このランスロットの前ではそんな小細工は無意味よ？冥界の霊騎士ランスロットの効果発動！このカード以外のカード効果が発動した時、ＯＲＵを一つ使う事でその効果を無効にし破壊するわ。エフェクトアブソーブ！」

「そ、そんな⁉　」

『これで決まったね』

ああ。だがいいデュエルだったぜ

「これでラストよ。《ネクロ・ガードナー》の効果は無効となり、冥界の霊騎士ランスロットの攻撃は続行されるわ。ソウルエナジースラッシュ！」

「やっぱり……幽々子様は強いです……」

２００　２０００＝－１８００

win　西行寺幽々子

「ふぅ……今回も負けてしまいましたね……」

「でも妖夢もかなり腕を上げてたわよ？私だって途中でヒヤヒヤしたもの♪」

「いえ、私はまだまだです」

「そんな事は無いぜ？妖夢」

「十代さん……」

「俺も妖夢のデュエルを見ててちょーワクワクしたもんな。ガッチャ！最高にいいデュエルだったぜ」

「っ⁉　はい！ありがとうございます！」

妖夢は笑顔で頭を下げお礼を言った。妖夢は自分の力にまだ気づいていないらしい。絶対に妖夢は強くなる。それも指折りの実力者に……

「それにしても一つだけいいか？」

「はい。なんですか？」

「《一時休戦》の発動時にニサシとザンジでランク４のエクシーズをだす手もあったんじゃないか？」

「ああ、それですか。実は私はまだランク４のエクシーズは持ってなくて……」

「えっ？そうなんか？」

やっぱみんなが使うって言っても簡単には手に入らないってわけか

「ゼンマインは紫様が下さったものでして、今でも使わせて貰ってます」

「紫？」

「紫は私の親友よ♪」

幽々子さんの親友か。って事は幻想郷にデュエルモンスターズを広めた張本人ってわけだな

「あっ、そうだ妖夢～」

「どうしたんですか？幽々子様」

「私デュエルしたらお腹空いちゃった♪」

「あー！そう言えば俺も腹減ってたのすっかり忘れてたぜ～」

「分かりました！では直ぐに作りますね！」

妖夢はそう言って小走りで白玉楼の中へと入っていった

「……十代君。貴方、妖夢のデュエルを見てどうだった？」

「ん？ああ、妖夢は強いよ。いづれかなりのデュエリストになる。俺はそう思う。ただ……」

「ただ……何？」

「……いや、なんでも無いよ」

「……ふふ、そう。まぁ貴方からのお墨付きが貰えれば大丈夫ね♪」

「はは、そう言っていただけて光栄だよ」

「じゃあ早く中に入りましょ♪何時迄ここに立っててても仕方ないもの」

「ああ、そうだな」

俺が途中で止めた言葉。それは恐らく幽々子さんも気付いている。幽々子さんと俺の考えは同じだろう。だからこそ言わなかった。俺も幽々子さんも、妖夢の成長を願っている。1人のデュエリストとして……。

デュエリストには言葉はいらない。真のデュエリストは言葉にしなくても、デュエルの中で……カードを通じて語ればいい。だから妖夢もデュエルをする度に成長するだろう。過去の俺の様に……